

PLAY/GROUND Creation #3

The Pride

作 アレクシ・ケイ・キャンベル

翻訳 広田敦郎

演出 井上裕朗

作者覚書

この劇を上演する際、最も問題となるのは、二つの異なる時代のあいだの場面転換、衣裳替えを効率よく行なうことだろう。この問題の処理は演出家や美術家次第だが、いくつか考えを記しておく。

劇の冒頭は、一九五〇年代に上演される一九五〇年代の客間劇を見ているように感じられるのがいいだろう。ただし、劇が進むにつれ、その世界はゆっくりと崩壊し、ばらばらになっていく。家具や壁は次第に消えていき、後半になるとさまざまな場所へ移っていく。つまり説明的であったセットが場所を暗示するものとなっていく。ベンチ一脚で公園を表わし、ソファ一脚でシルヴィアのアパートを表わすのである。

一つの案としては、衣裳替えをうまく利用すること——できれば舞台上で行ない、観客にも一部見えるようにするといいたいだろう。より様式的な方法。そうすれば、連続する場面で俳優が異なる時代の役を演じる場合に役立つだろう。

最も重要なのは合流していくこと。二つの異なる時代が互いに溶け合っていくことだ。彼らは、外見でははっきり異なっている、精神ではお互いを知っている——一人の若い女性のとなりには、成長した彼女の自我が立っているのだ。衣服がちがう、ヘアスタイルがちがう、肌のきめがちがう……けれども目だけは同じだ。過去は亡霊となって現在に姿を現わし、同時に現在は先見の亡霊となって過去に姿を現わすのである。

登場人物

一九五八年

オリヴァー

三十代半ば

フィリップ

三十代半ば

シルヴィア

三十代半ば

医者

三十代後半

二〇〇八年

オリヴァー

三十代半ば

フィリップ

三十代半ば

シルヴィア

三十代半ば

男

ピーター

二つの時代のオリヴァー、フィリップ、シルヴィアは同じ俳優が演じる。一人の俳優が医者、男、ピーターを演じる。

場所

ロンドン

時

一九五八年と二〇〇八年

第1場

一九五八年

ロンドンにあるフィリップとシルヴィアのアパート。質素だが趣味がよい。たくさん
の本、ソファ一脚とアームチェア数脚、壁に二、三枚の絵画。
フィリップが玄関口に立っている。夜の外出着を着ている。オリヴァーが着いたと
ころである。

- 1 オリヴァー フィリップ。
2 フィリップ オリヴァー。
3 オリヴァー うん。
4 フィリップ ついに。
5 オリヴァー うん。
6 フィリップ いろいろ聞いているよ。
7 オリヴァー え？
8 フィリップ 君のこといろいろ。
9 オリヴァー まいったな。
10 フィリップ 全部いいこと。
11 オリヴァー ならよかった。
12 フィリップ シルヴィアはいつも君の話をしてる。
13 オリヴァー 本当に？
14 フィリップ おかげで嫉妬しそうだ。
15 オリヴァー その必要はない。
16 フィリップ 君を天才だと思ってるらしい。
17 オリヴァー 僕にもいろんな顔があるけれど、天才だけはちがう。

18 フィリップ 普通じゃないって。

19 オリヴァー そう？

20 フィリップ 普通とはちがうって。

わずかな間。

21 フィリップ コート預かろう。

22 オリヴァー ありがとう。

オリヴァー、コートを脱ぎ、フィリップに渡す。フィリップはそれをていねいに掛ける。

23 フィリップ ご婦人は少々遅れてるらしい。フェイス・ペイントってやつだな。

24 オリヴァー 僕が早く着いたから。

25 フィリップ いや。時間どおりだ。

26 オリヴァー 歩いてきたんだ。もうすこしかかると思ってた。

27 フィリップ 気持ちいい夜だ。

28 オリヴァー うん、雨は降ってない。

29 フィリップ メイダ・ヴェールからずっと？

30 オリヴァー そう、メイダ・ヴェールから。

31 フィリップ 公園を抜けて？

32 オリヴァー そう。

33 フィリップ ずいぶん歩いたね。

34 オリヴァー 楽しかった。

35 フィリップ いい季節だし。
36 オリヴァー 花が咲き乱れてた。
37 フィリップ いいね。

わずかな間。

38 フィリップ 飲みもの、何にしよう？
39 オリヴァー スコッチは？
40 フィリップ 氷と水？
41 オリヴァー ぜひ。
42 フィリップ 僕もそうしよう。

フィリップ、小さなドリンクテーブルへ行き、二人分の酒を注ぐ。

43 フィリップ 彼女、君の物語は素晴らしいって。
44 オリヴァー 精神をとらえてくれてる。
45 フィリップ 本心に好きらしい。その本がね。
46 オリヴァー 彼女、すごく、すごく才能がある。
47 フィリップ 話し出したら止まらないんだ。何か、花園のこと。
48 オリヴァー まあ、どちらかと言えばジャングルだけど。
49 フィリップ ジャングル。
50 オリヴァー イギリスのど真ん中のジャングルと言おうか。それかせめてうつそうとした熱帯の花園か。
51 フィリップ なぜ児童文学の作家は花園を好むんだろう？ やたらと書かれているようだけど。たいて

52 オリヴァー

53 フィリップ

い、秘密の花園ってやつだな。
たしかに。

まあ、おかげで彼女は大忙し。妙な生きもののスケッチがあちこちに散らばってる。このあいだなんか、ぎよっとする絵がバスルームにあった。頭が二つあるアンテロープみたいな。実にそえられる。

54 オリヴァー

55 フィリップ

きつとベリーフィンチだ。金曜の朝に見せてもらうことになってるやつだ。
ベリーフィンチ、それだ。それにひきかえ、僕の人生なんて味気ないものに見えるだろうな。

56 オリヴァー

57 フィリップ

58 オリヴァー

味気ない人生なんてものはないよ。
君は生活のために不動産を売り歩いたことがないだろう。
未開拓ならまだしも、味気ないなんて。

フィリップ、オリヴァーに飲みものを渡す。二人座る。

59 フィリップ

60 オリヴァー

61 フィリップ

62 オリヴァー

63 フィリップ

64 オリヴァー

65 フィリップ

66 オリヴァー

67 フィリップ

68 オリヴァー

君のような人には会ったことがない。作家にはね。
そう？

一人、母の気色悪い友人を除いては、お菓子の焼き方の本を出してる。
お菓子の焼き方？

重要な本とは言えないだろうね。

それは少々失礼だよ。お菓子の本は悪くない。

これまで書いたのは子供の本だけ？

だいたい。旅行書も二冊。

シルヴィアが言ってた。一冊はアテネの。

一年住んできた。

69 フィリップ もう一冊は？

70 オリヴァー もう一冊はレバノン。

71 フィリップ レバノン？

72 オリヴァー でも主に惹かれるのは子供の本。

73 フィリップ なぜだろう。

74 オリヴァー わからない。思うに自由奔放にやりたいってことかな。

75 フィリップ 自由奔放？

76 オリヴァー 可能性が無限だから。大人の小説の決まりごとや因習にはとても大きな束縛を感じる。

77 フィリップ そうなんだ。

78 オリヴァー おしゃべりするトラや魔法の鏡の世界のほうがずっと楽しい。力を発揮できる。

79 フィリップ なるほど。

80 オリヴァー いつの日か大人の小説を書くことがあれば、想像力をもっと華やかに飛躍させることになるだろうけど、当面は十二歳未満の読者で満足だよ。

81 フィリップ まあ、屋根のある場所には住んでるようだ。

82 オリヴァー 雨漏りはしても、どうにかなってる。

83 フィリップ じゃ、とりあえず本に。

84 オリヴァー 本に。

二人は乾杯する。

85 フィリップ 不思議だ。

86 オリヴァー 何が？

87 フィリップ ドアを開けたとき。

88 オリヴァー 何？

89 フィリップ 君に見覚えがある、ってことかな。

90 オリヴァー ああ、僕もそう思った。

91 フィリップ 君も？

92 オリヴァー うん、思った。

93 フィリップ まあ、出くわしたことはあるかもしれない。地下鉄かどこかで。

94 オリヴァー かもしれない。

95 フィリップ 不思議なことは起きるもんだ。

シルヴィア登場。夜の外出のために洗練された服装をしている。

96 フィリップ お出ました。

97 シルヴィア (オリヴァーに) 訊問されてたんじゃない？

98 フィリップ 容赦なく。

99 オリヴァー やあ、シルヴィア。

100 シルヴィア 男のくせにヤキモチ焼きなの。

101 フィリップ 猛烈に。

102 シルヴィア すぐかっとなるの。フィリップ、お願い。

ドレスのいちばん上のホックを留めてもらおうと、フィリップに背を向ける。

103 シルヴィア これでもたまには役に立つのよ。お酒は出したみたいね。

104 オリヴァー 完璧なおもてなだよ。

105 シルヴィア ならしつけたかいたったわ。

106 フィリップ 飲み込みは早いんだ。ジン？

107 シルヴィア お店の予約、八時よ。
108 フィリップ 軽く一杯。
109 シルヴィア ありがとう、あなた。

フィリップはバーへ行き、彼女の分を注ぐ。

110 フィリップ 君がオリヴァーの話しかしないって言ってたところさ。
111 シルヴィア わたしが恥をかくようなことは言っていないでしょうね、雇い主の前で？
112 フィリップ どうかな。
113 シルヴィア わたし、ちよっぴり緊張してたのよ。なぜかしら。
114 オリヴァー 緊張？
115 シルヴィア 二人が会うこと。
116 フィリップ (オリヴァーに) だから先延ばしにしてたんだな？
117 オリヴァー なるほどね。
118 シルヴィア 馬鹿みたい、ほんと。たぶん、気が合えばって思っただけ。
119 フィリップ 僕らはよろしくやってたよ。
120 シルヴィア お互い好きになれば、ってね。
121 オリヴァー そうならない理由はない。
122 フィリップ 君たちが僕に隠れて燃えるような情事にふけていたことがバレないかぎり、大丈夫。
123 シルヴィア 言った通りでしょ、彼のユーモアのセンス。
124 フィリップ ユーモアのセンス？
125 シルヴィア その欠如、というべきね。
126 フィリップ 残酷だな。
127 シルヴィア 正直なだけ。

ややぎこちない間。フィリップはシルヴィアに飲みものを渡す。

128 シルヴィア イタリア料理は好きかしら、オリヴァー。

129 フィリップ すぐそこの小さな店を予約したんだ。

130 オリヴァー いいね。

131 シルヴィア フィリップはいつも馬鹿にするんだけど、わたしはチャミングなお店だと思うの。

132 フィリップ 真っ赤っかなんだ。何もかも赤い。

133 オリヴァー 多少の赤は悪くない。

134 フィリップ 壁もテーブルクロスもウェイターの顔も。何もかも真っ赤。

135 シルヴィア フィリップは、絶対にイタリア人じゃないって。

136 フィリップ ユーゴスラヴィア人だよ。絶対ユーゴスラヴィア人。イタリア人のふりをしてる。

137 オリヴァー 興味深いね。

138 シルヴィア 料理はいけるの。

139 フィリップ 強いセルビア風味。

140 オリヴァー それはおいしそうだ。

三人が座るわずかな間。

141 オリヴァー すごくうれしいよ、ベリーフィンチをお宅のあちこちで見かけると聞いて。

142 シルヴィア まだスケッチの段階だけど、もうすぐよ。

143 オリヴァー 待ち切れない。

144 シルヴィア 金曜までにもうすこし固まれば。いまは紫がちよっと強すぎて。

145 フィリップ そのベリーフィンチとジャングルの話、気になるな。早く読んでみたい。

146 シルヴィア
147 オリヴァー
あとすこし。

148 シルヴィア
あとすこし。それまでは、詮索禁止。

149 フィリップ
僕は悪くない。君があんまりのぎよつとする絵を家じゅうに置きっぱなしにするからだろ。
150 オリヴァー
詮索好きなんだ？

151 シルヴィア
とつてもたちが悪いの。

152 フィリップ
バスルーム。ソファ。冷蔵庫のなかまで。

153 オリヴァー
冷蔵庫？

154 シルヴィア
一度だけ。

155 フィリップ
あれはまいった。

156 シルヴィア
玄関のベルが鳴ってて。夕食つくってて。ちよつとうっかりしただけ。

157 フィリップ
君の物語が我が家を侵略したんだ。なのに僕が非難されてる。

158 オリヴァー
申しわけない、謝るよ。

159 フィリップ
ならば赦そう。

彼らは笑う。間。

160 フィリップ
僕は君たちがうらやましいんだよ。

161 オリヴァー
うらやましい？

162 シルヴィア
いったい何が？

163 フィリップ
いや、だから、君たちの仕事。何かをつくるってことかな。生活のための仕事にそれな
りの情熱を注げること。

164 オリヴァー
情熱でもない。孤独のほうが。

165 シルヴィア
フィリップは自分の仕事にとつても不満なの。そうでしょう？

166 フィリップ 僕は家売ってるんだ、オリヴァー。
 167 オリヴァー 言ってたね。
 168 フィリップ 家やアパートを。
 169 シルヴィア これだけはわかってあげて、フィリップがいまの仕事に就いたのは事故のようなものの。
 170 オリヴァー 事故？
 171 フィリップ 父が死んだんだ。
 172 シルヴィア フィリップがまだ二十一のとき。
 173 フィリップ 僕は大学を出たばかり。
 174 シルヴィア お父さんは長年不動産売買の会社を経営してたの。フィリップのお兄さんが継ぐことになっ
 175 フィリップ そう、兄はそうなるように仕込まれてた。父は兄を仕込んだ。僕は使えないやつだった。
 176 シルヴィア ふらふらしてたというか。
 177 フィリップ でもその二年後、ロジャーが――
 178 シルヴィア 兄のね。
 179 フィリップ ロジャーが死んだの。
 180 シルヴィア 自動車事故。ひどかった。
 181 フィリップ 僕は母を養わなきゃならなかった。
 182 シルヴィア 妹も。
 183 フィリップ だから選択の余地がなかった。
 184 シルヴィア たまに思うの、あなたはどうしてただろう。何になっていただろう。事情が違っていたら
 185 フィリップ ね。
 186 オリヴァー さあ、僕にもわからない。移住してたかな。
 移住？

187 シルヴィア
188 オリヴァー
興奮するね。

189 シルヴィア
オーストラリアとか、カナダとか、そういうところ。

190 フィリップ
新天地へ。

191 シルヴィア
覚えてる、アフリカへ引っ越すって考えに取り憑かれたこと？

192 フィリップ
アフリカ、うん。

193 シルヴィア
手当たり次第に本を読んだ。ケニアの本、ローデシアの本。うちじゅうに転がってた。

194 オリヴァー
アフリカは僕も行ってみた。

195 フィリップ
ブライトンより遠くへ行ったことはないけどね、僕は。

196 シルヴィア
いつの日か。

197 オリヴァー
いつの日か。

198 フィリップ
そして目を覚ますと、客を空き家へ案内することに人生の大半を費やしてる。

199 シルヴィア
もっとさえない人生もあるわ。

200 フィリップ
そうかな？

201 オリヴァー
シルヴィアが正しいよ。

202 フィリップ
(やさしく) 彼女はいつでも。

間。

203 フィリップ
でも君のほうは、オリヴァー、ブライトンよりも遠くへ行ってる。
何カ所か。

205 シルヴィア
もう、謙遜しないで、ありとあらゆるところでしょ。

206 オリヴァー
そうでもないよ。

207 シルヴィア
オリヴァーはギリシャに住んでいたの。

228	シルヴィア	ああ、さつき彼が……
		イタリアにも。ベイルートにも。シリアにも。
		世界のどこよりも親しみを感じる地域でね。
		興奮するね。住んだことがあるなんて。
		オリヴァーはアテネを拠点にしていたの。
		素晴らしい。
		アクロポリスのふもとの小さな家に住んでた。ネズミはいたけど、すごくチャームングで。
		なんてロマンティック。
		キッチンの窓から首を出せば、パルテノン神殿がちらっと見える。
		パルテノン神殿。
		フィリップとわたし、ギリシャまでドライブするのいつの日か、そうよね？
		君がそう言うなら。
		フランスからイタリアへ抜けて、アドリア海を渡って。
		いつの日か。
		それから島をめぐる。
		どの島もきれいだよ。
		フィリップ、わたし、『オデュッセイア』、チェスボード。
		ジンも忘れずにね。
		ジンも忘れずに。
		いつの日か。

間が空いてしまう。シルヴィアがふと何かを思い出す。オリヴァーのほうを向く。

話してあげて、デルポイのこと。

229 フィリップ デルポイ？
 230 シルヴィア そう、デルポイ。あの話、デルポイであなたに起きたこと。
 231 オリヴァー ああ、あれ……
 232 シルヴィア デルポイの啓示。
 233 フィリップ デルポイの啓示？
 234 シルヴィア オリヴァーがとっても素晴らしい話を……
 235 オリヴァー 大した話じゃない。
 236 フィリップ デルポイの啓示。
 237 シルヴィア 素晴らしいのよ。
 238 フィリップ 怪奇小説のタイトルみたいだ。『デルポイの啓示』。
 239 オリヴァー どうか、フィリップは……
 240 シルヴィア このあいだ休憩中、オリヴァーがデルポイに行った話をしてくれたの。
 241 オリヴァー 大した話じゃないよ。何ならまたいつか。
 242 シルヴィア そこでオリヴァーにあることが起きたの。神秘体験って呼んでもいいかしら？
 243 フィリップ いいね、ぜひとも。
 244 オリヴァー いや、ほんとうに……
 245 フィリップ 頼むよ。
 246 オリヴァー そう興奮することでも興味深いことでもない。実際大した話じゃない。ただ不思議なこ
 247 フィリップ とが起きただけで。
 248 オリヴァー 拝聴したいね。
 249 シルヴィア がっかりするよ、たぶん。
 250 オリヴァー もう、話して、オリヴァー。
 251 シルヴィア うん、デルポイは、ギリシャで最も訪ねてみたい場所、遺跡の一つだったんだ。
 神託。

252 オリヴァー

そこで僕はアテネからおんぼろの古いバスに何時間も揺られて、曲がりくねった山道を行った、たしか着くころには日が暮れかけていて、バスを降りると小さなホテルの真ん前。ホテル・ゼウスとかいう。外国人がほかにも何人かいた——アメリカ人の老夫婦、ドイツ人、イギリス人も何人か、そこに一人、耐えがたい女性がいてね、大きくて偉そうな声と自信満々な意見をもち合わせてる。

253 フィリップ

最高の組み合わせとは言えないね。

254 オリヴァー

みんなで軽い夕食を済ませて、すぐに寝た。

255 フィリップ

もう釘づけだよ。

256 オリヴァー

で、翌朝目を覚まして、よろい戸を開けると、もう……その眺めはまさに……

257 シルヴィア

息を呑む。

258 オリヴァー

まさに息を呑む眺めだった。つまり、どんな言葉でも足りない。表現のしようがない。

259 フィリップ

行ってその目で見ないと。あれを信じるには。いつの日か。

260 オリヴァー

景色がね、あの構図。実にうつとりする。とても、とても劇的で。山の高いところにいる

261 シルヴィア

から、峰を見上げれば雪が残っている、でも眼下を見渡せば、斜面に広がるオリブの林

262 オリヴァー

が銀に輝いて、海が見える。

263 フィリップ

なんて美しい。

264 オリヴァー

コリント湾の水面^{みな}が見える。そこには何か目を見張るものがあるんだ。つまり、真に、真

265 シルヴィア

に美しいもの。するとわかってくる、なぜギリシャ人はそこを神託を聞く場所を選んだか。

266 オリヴァー

たぶんこれほど美しく静かな場所なら何かの訪れを感じられる。自分の時間から連れ出

267 フィリップ

してもらえる、時間のそとへ。より大きな絵が見える、というか。

268 オリヴァー

それでおしまい？ 君の啓示は？

269 シルヴィア

まだこれからだよ。

270 フィリップ

もう、フィリップ、聞いてあげて。

266 オリヴァー

で、朝食のあと、古代劇場や神託所跡のほうへ行っただけで、アメリカ人の老夫婦もついてきた。たぶん僕を学者か何かだと思ったんだろう。質問してきてはがっかりするんだ、僕の答えが思ったほど詳しくないものだから。

267 シルヴィア

たしかにそう見える。特に眼鏡をかけてると。

268 オリヴァー

結局、厄介払いできたけど。どこかでいなくなって、一人で回ることができた。すこしほっとしたね。

269 フィリップ

そりゃそうだ。霊的体験を味わうのに、アメリカの観光客が至近距離にいたら困るだろう。とにかく遺跡のなかをぶらついてみた。一人っきりで、それはもう、とても静か。聞こえてくるのはセミがじりじり鳴く声だけ。そよ風が木々を揺らす音も。歩きながらちよつと放心してきた、本当に。

271 フィリップ

いよいよ啓示の訪れか。

272 オリヴァー

そこで聞こえたんだ。

273 フィリップ

それきた。

274 オリヴァー

たぶんそれは声としか言いようがない。普通の意味での声じゃない。即座に声とわかるものではなかった。

275 フィリップ

まさか例のアメリカ人の声とか？

276 シルヴィア

もう、フィリップ、静かに。

277 フィリップ

どうせ豚に真珠。

278 オリヴァー

じっと立っていたら声が聞こえた。その声はこんなことを——何も心配はいらないって。

279 フィリップ

心配はいらない？何が心配いらないって？

280 オリヴァー

うん、いつの日か、何年も何年も先のこともかもしれないけれど、いくつかがのことがらで理解されるようになる、僕らに具わったいくつかの側面についてもっと深く理解される、いま僕らが感じる困難も、いま僕らがしがみつく恐怖も、いま僕らが眠れない夜も、無駄ではなかったと思える日が来る……その時代を生きる人々は、五十年先、五百年先かもしれ

281 シルヴィア

282 オリヴァー

283 シルヴィア

284 フィリップ

285 オリヴァー

286 フィリップ

287 シルヴィア

288 オリヴァー

289 シルヴィア

ないけれど、その理解のおかげで幸せになつて、賢くなつて。より善き人間に。素晴らしくチャーホフ的。

しかもなんだかその声は、まさにその未来から届くような気がした。いわば、未来の目覚めた僕らから。これでおしまい。これが僕の啓示。

人の心に何かを残す場所であるわ。人の心に触れる場所。

たしかに、わかるよ。想像つかないからね、この近所でそんなふうに関眼するなんて。

ナイツブリッジならまだしも、ピムリコではね。

だけど教えてほしかったな、今晚ディナーするお相手がしょっちゅうお告げを聞く男だつて。もつと覚悟しておいたのに。

もう、フィリップ、失礼よ。

本当に恥ずかしくなってきた。

そんな、いいの。ふざけてるだけよ。

三人笑い、そして間がある。

290 シルヴィア

291 オリヴァー

292 フィリップ

293 シルヴィア

294 フィリップ

295 シルヴィア

296 フィリップ

297 シルヴィア

298 フィリップ

そろそろ行かないと。

うん。

ユーゴスラヴィア人を怒らせたら大変だ。

もうやめて。カーディガン取ってこなきゃ。すぐ戻る。

二人きりにされちゃ困る。間がもたないよ。

そんなことないでしょ。

まあ、とにかく急いだ。

わかった、わかった、いじめないで。

急いで。

シルヴィアが部屋を出ると、男二人が残される。間が空いてしまい、そして二人同時に話そうとする。

299 フィリップ でも本当に……

300 オリヴァー 何かすごく……

301 フィリップ お先に。

302 オリヴァー いや、どうぞ……

303 フィリップ うん、本当にね、この仕事、シルヴィアにはすごく大切なんだ。すごく楽しんでるよ、君との仕事を。

304 オリヴァー 僕にとってもすごく大切だよ。

305 フィリップ 一つの企画にこれほど打ち込んだことはなかったと思う。しかもこれほど恵まれたタイミングで。

306 オリヴァー タイミング？

307 フィリップ 彼女には必要だった、いろいろあったあとだったから。

308 オリヴァー 体調がよくなかったとは言っていたけど。

309 フィリップ うん。

ぎこちない間。

310 フィリップ 昔女優だったのは知ってるだろう？

311 オリヴァー 彼女から聞いた。

312 フィリップ 挿絵画家を始める前。

313 オリヴァー うん。

314 フィリップ 二、三年だけど。
 315 オリヴァー 舞台の彼女を見てみたかった。
 316 フィリップ でもやめることにした。彼女いわく、二人のために。
 317 オリヴァー そう。
 318 フィリップ でもある意味こわくなったんだろう。
 319 オリヴァー こわくなった？
 320 フィリップ 抜群だったんだ。おそろしくらい、本当にうまかった。人物になりきる。その人の人生に入り込むんだ、どつぷりと。あの想像力だから。
 321 オリヴァー すぐよかったろうね。
 322 フィリップ でもやっぱり、ああいう世界は……
 323 オリヴァー 演劇の？
 324 フィリップ 得意じゃなかったんだ。きつと。
 325 オリヴァー そうなの？
 326 フィリップ でも本当にうまかった。本能、かな、直感。そして共感する力。そういう資質。
 327 オリヴァー たしかに。
 328 フィリップ でも賢明だったよ。
 329 オリヴァー 賢明？
 330 フィリップ やめたのはね。
 331 オリヴァー そう？
 332 フィリップ 繊細だから。
 333 フィリップ 間が空いてしまう。
 眠れない夜があるんだ、君には？

失礼？

さっき言ってたね。話の中で。神託の。たしかこう言ってた、いくつかがらが理解されるようになる、いま僕らが眠れない夜も無駄ではなかったと思える日が来るって。

ああ。

だからよくあるのかなって。眠れない夜が。

たまにね。

あのベリーフィンチどもが脳内を漂ってるんだな。

かもね。

長い間。何かが起きたのである。そこへシルヴィアが登場する。

お待たせ。

そろそろだ。

素敵だよ。

ありがとう、オリヴァー。

フィリップが明かりを消していく。

わたし考えていたの。

何を？

とっても大事な夜になるって。

そうかな？

わたしにとって。わたしたち三人にとって。

どうして？

オリヴァー

フィリップ

オリヴァー

フィリップ

オリヴァー

フィリップ

オリヴァー

シルヴィア

フィリップ

オリヴァー

シルヴィア

シルヴィア

フィリップ

シルヴィア

フィリップ

シルヴィア

フィリップ

351 シルヴィア さあ、わからない。

352 フィリップ 鍵は持った？

353 シルヴィア ええ。

354 フィリップ じゃ行こう。

三人はドアのほうへ行く。と同時に、一人の男が登場する。男はナチスの制服を着て
いる。三人には見えないが、登場とともに、彼らのそばをかすめて通る。

355 シルヴィア いまの何？

356 フィリップ 何って何が？

357 シルヴィア 何か……何か感じたの。

358 フィリップ 何を？

男は部屋の中央へ行き、そこに静かに立つ。

359 シルヴィア 何でもない。

360 フィリップ コート忘れないで。

361 オリヴァー あったかくはないよ。

シルヴィアはコートを取る。三人はドアを開け、出ていこうとする。

362 フィリップ で、どうして大事な夜になるの？

363 シルヴィア 気にしないで。声に出して考えただけ。

364 オリヴァー よくそうするんだ？

369	368	367	366	365
フィリップ	シルヴィア	オリヴァー	フィリップ	シルヴィア
変人なんだ。	意地悪はやめて。	そうなの？	変人なんだ。	それだけ。

三人はドアを閉めて去る。ゆっくりと場面転換が、それとはわからないよう、薄明かりのなか行なわれる。何か音楽を用いてもよいだろう——一九五〇年代の芝居の場面転換で使われるようなもの——ソフトでエレガントなもの。部屋に二、三の変化がある——巨大な現代風の写真をかけてもよいし、プラズマスクリーンを置いてもよい——そして五〇年代風レトロスタイルに装飾された現代のアパートとなってもよい。ただし、基本的には同じ部屋であり、変化は表面的な、装飾的なものである。五〇年代の音楽がいつの間にか新しいもの、やかましいもの、おそらく激しいものに変わっていく。そのあいだナチスの制服の男は部屋の中央に立ったまま、身動きせずに黙っている。

第2場

二〇〇八年

まだ薄暗いうちにオリヴァーが登場するが、今度は下着姿である。ガウンを引きずっている。部屋のどこかの床に座る。そばに男が立ちはだかり、オリヴァーを見下ろしている。照明が戻り、音楽が打ち切られる。男は最初のいくつかの台詞をドイツ訛りで話す。

1 男 顔上げんじゃねー、メスブタ。

2 オリヴァー すみません。すみません。

3 男 上げんなつて。

4 オリヴァー すみません。

5 男 絶対上げんじゃねーぞ、クズのメスブタ。お前は何だ？

6 オリヴァー 僕は何だ？

7 男 お前は何だ？自分が何だか言ってみろ！

8 オリヴァー 僕は何か。

9 男 何だか言ってみろクソつたれ、この変態のメスブタ。

10 オリヴァー 自分はド変態のメスブタです。

11 男 よおし、その調子だ。さあ、俺のブーツなめろ。

オリヴァーは身を乗り出し、男のブーツをなめようとするが、やめてしまう。

12 オリヴァー オッケー、ごめん、もういいよ。

13 男 黙ってなめろ。

14 オリヴァー いやマジで、やめてくれる。お願い。タイム。ストップ。アブラカダブラ。

15 男 アブラカダブラ？
 16 オリヴァー そう。お願い。ストップ。アブラカダブラ。ほんとにアブラカダブラ。
 17 男 (本来の案外キャンピングなロンドン訛りで) お金は払ってよ。
 18 オリヴァー うん。
 19 男 だってここまで来のに二時間かかったんだよ。アールズコートから。
 20 オリヴァー うん。地下鉄。立ち往生したって。さっき聞いた。
 21 男 濡れたし。びしょびしょに。
 22 オリヴァー ごめん。
 23 男 びしょ濡れだよ。
 24 オリヴァー うん。
 25 男 お金払ってよ。
 26 オリヴァー もちろん。もちろん払う。
 27 男 遠いところ来たんだから。
 28 オリヴァー わかつてる。

間。

29 オリヴァー ちょっと気分じゃなくて。電話しなきゃよかった。退屈してて。
 30 男 あっそ。
 31 オリヴァー ちょっとさみしくて。
 32 男 みんなそうでしょ。
 33 オリヴァー ちょっと酔ってたのかも。
 34 男 わかったよ。

間。

35 オリヴァー 一杯いっしょにどう。

36 男 お金払うよね。

37 オリヴァー せっかくだし。

38 男 まだザーザー降りか。

39 オリヴァー スコッチでも。

40 男 まあ、だったら。

オリヴァーはスコッチを注いでやり、グラスを渡す。二人はしばらく黙ったまま座り、雨音を聞く。

41 オリヴァー 超うまかったよ。迫真ってゆーか。

42 男 ああ。

43 オリヴァー 言葉責めから何から。

44 男 ありがと。

45 オリヴァー どういたしまして。

間。

46 オリヴァー 写真もイケてる。ネットの。

47 男 よく言われる。

48 オリヴァー あのジャーマン・シェパード飼ってるの？

49 男 お姉ちゃんの。

50 オリヴァー 連れてきたらどうしようって。

51 男 ああ。

52 オリヴァー 効果はあったけど。

間。

53 オリヴァー 役者さん？

54 男 だった。

55 オリヴァー やっぱり。

56 男 いまいち食ってけなくて。

57 オリヴァー 舞台の？

58 男 だいたい。あちこちで。ノーサンプトン。ブリストル。イプスウィッチ。

59 オリヴァー 地方ね。

60 男 コマーシャルも一回やった。ドッグフードの。ぼろ儲け。

61 オリヴァー どうりで見覚えが。

62 男 あと変な吹き替え。

63 オリヴァー 苦勞するね。

64 男 余計なお世話。

間。

65 オリヴァー で、いまは何を？

66 男 ああ、うん。いろいろかじってる。これでしょ、まず。

67 オリヴァー そうね。

68 男 週二で花屋の手伝い。

69 オリヴァー いいね。

70 男 演技指導。

71 オリヴァー すごい。

72 男 そんな感じ。

73 オリヴァー ヘー。

間。

74 オリヴァー 彼氏にふられちゃってね。

75 男 あっそ。

76 オリヴァー 今年三回目。

77 男 ふるのくせになってんじゃない、そいつ？

78 オリヴァー 今回はマジ。レコード持ってた。

79 男 つき合ってたどれくらい？

80 オリヴァー 一年半。

81 男 寿命でしょ。

82 オリヴァー やっぱり？

83 男 僕なんか、せいぜいもって八ヶ月。

84 オリヴァー そうなの？

85 男 うん。

間。

86 男 去年エクアドルのやつとつき合ってた。結婚しようって言われて。デカマラ、僕の腕ぐら
い。

87 オリヴァー 最高じゃん。

88 男 あんなの見たことないよ。

89 オリヴァー 僕、ある。

90 男 でもキモくてさ。

91 オリヴァー キモい？

92 男 僕の体にウンコしたがって。いきなりだよ。「お前の体にクソしてーよって」。人っていろ
いろ。

93 オリヴァー 変わってる。

94 男 変態すぎ。

間。

95 男 じゃ、彼氏にふられて悲しいんだ？

96 オリヴァー うん。だね、そう思う。

97 男 そっか。

間。

98 男 やめて。

間。

99 オリヴァー 三日目だよ。
100 男 三日目？
101 オリヴァー ふられてから。
102 男 ああ。
103 オリヴァー それからどこにも出かけてない。
104 男 そう。
105 オリヴァー 引きこもり。いろいろ考えちゃって。
106 男 吹っ切れるよ。
107 オリヴァー どうかな。
108 男 吹っ切れるもんだよ、何事も。
109 オリヴァー 食べるものなくなった。テスコ行かなきゃ。
110 男 飢え死にしちゃうよ。
111 オリヴァーほんと。
112 男 吹っ切れるって。
113 オリヴァー どうかな？

間。

114 男 で、何で生活してんの？
115 オリヴァー ジャーナリスト。もの書き。
116 男 いいじゃん。
117 オリヴァー そう？
118 男 堅気でしょ。僕とはちがう。
119 オリヴァー 自分でそう言うなら。

120 男 コスプレとはちがう。
121 オリヴァー フリーランスだよ。書いてんのはデイリー・メールばっか。
122 男 食ってくためでしょ。
123 オリヴァー うん。新しい雑誌の仕事始めるとこだけど。

間。

玄関の向こうで鍵の音がする。ドアがひらく。フィリップ登場。オリヴァーと男を
見ると驚いた様子。オリヴァーは急に立ち上がる。

124 フィリップ ぎげんなよ。

125 オリヴァー ヤバ。

126 フィリップ マジでふげげんなよ。

127 オリヴァー これはべつに……

128 フィリップ 俺はてつきり……

129 オリヴァー やべっすねー。

間。

130 フィリップ グラスゴー行ってるって思った。

131 オリヴァー キャンセルした。

132 フィリップ グラスゴー行ってくて言ったよね。

133 オリヴァー まだ鍵持ってたんだ。

134 フィリップ ここにはいないって言うから。

135 オリヴァー 鍵は置いてったもんだと。

136 フィリップ 荷物取りにきたんだ。最後のスーツケース。
137 オリヴァー そう。
138 フィリップ 本の。
139 オリヴァー うん。

オリヴァーはフィリップが男を見ているのに気づく。フィリップは制服をじっと見ている。

140 オリヴァー こちらは……
141 フィリップ いい。すぐ行く。
142 オリヴァー ゆっくりどうぞ。
143 フィリップ ベッドルームにある。
144 オリヴァー うん。ベッドの脇。
145 フィリップ すぐ終わる。
146 オリヴァー オッケ。

フィリップは一瞬行き先に迷い、早足で部屋を出てベッドルームに入る。

147 オリヴァー ヤベ。ヤベ、ヤベ、ヤベ、ヤベ、ヤベ。お願い、帰って。
148 男 はあ？
149 オリヴァー もう帰って。お願い。帰って。
150 男 飲み始めたところだよ。
151 オリヴァー お願い帰って。
152 男 お金もらってないよ。

153 オリヴァー うん。
154 男 もらうまで動かないから。

オリヴァーはあわてて財布を取りにいき、二十ポンド紙幣を数枚取り出す。

155 オリヴァー はい。おつりはいい。帰って。
156 男 (金を数え、これ脱がなきゃ。
157 オリヴァー だめ。行かなきゃだめ。一大事なの。
158 男 ナチスの格好で地下鉄乗れないよ。
159 オリヴァー 勝手にして。いいから急いで。お願い。

男は自分のバッグを取ってバスルームへ向かい、振り返る。

160 男 あいつ、よりは戻さないね。
161 オリヴァー さっさと着替えろって。

男は退場。フィリップが小ぶりのスーツケースを運んで出てくる。

162 フィリップ 終わり。
163 オリヴァー よかった。
164 フィリップ 行くよ。
165 オリヴァー だめ。

間。

166 オリヴァー お願い。待って。一分だけ。一杯。それだけ。絶対。

167 フィリップ どうかな。

168 オリヴァー お願い。

169 フィリップ 相手いるじゃん。

170 オリヴァー ああ、あれ。

171 フィリップ そう。

172 オリヴァー あれはただの……単なる……

173 フィリップ 弁解はいい。

174 オリヴァー ニックの友達。コスプレ。コスプレパーティー。ニックの家に行くんだって。一杯飲ん

だの。それだけ。帰るところ。

175 フィリップ ニックはいまブラジルだ。

176 オリヴァー もちろんだよ。知ってる。

177 フィリップ ふぎけんなよ。

178 オリヴァー ニックはいまブラジルだよねー。

179 フィリップ ふぎけんなよ、オリヴァー。

180 オリヴァー はい。

間。

181 オリヴァー お願い。お願いもうちょっといて。十五分。それだけ。

間。

182 フィリップ あいつ。

183 オリヴァー うん。

184 フィリップ ナチスの制服着てる。

185 オリヴァー うん。キモいよね？

186 フィリップ どこまでエスカレートするんだよ。自分にあきれないわけ？

187 オリヴァー うん。あきらめる。あきらめます。

間。

188 オリヴァー お願いいて。

189 フィリップ いたくない。

190 オリヴァー お願い。

間。

191 オリヴァー クローゼットがすかすかに見えちゃって。

192 フィリップ はあ？

193 オリヴァー だから、気づかなかったってこと、服あんなにたくさん持ってたんだって。

194 フィリップ ああ。

195 オリヴァー いきなりすかすかに。

間。

196 オリヴァー 元気そうね。

197 フィリップ
198 オリヴァー
変わってない。
だね。

199 フィリップ
まだ三日だよ、オリヴァー。三日じゃ人は変わらない。

200 オリヴァー
もっと長かったみたい。ちがって見えるよ。

201 フィリップ
そう。

202 オリヴァー
もう僕のものじゃないみたい。

間。

203 オリヴァー
つまりね、フィリップ、君なしで生きていく自信がなくて。

男がバスルームから戻ってくる。自分の服を着て、バッグを持っている。

204 男
まだザーザー降り。

205 オリヴァー
あっそ。

男はテーブルへ行き、飲みかけのスコッチを飲み干す。オリヴァーとフィリップは彼を見守る。

206 男
きらいじゃないんだ、この仕事。おもしろい人間と出会えるし。すぐいろいろな人間と。サラリーマンとか絶対向かないし。何時間もコンピューターとにらめっこなんて。地下鉄乗って、ロンドンじゅうを回るのもきらいじゃない、ザーザー降りで歩き回るのも。でもささやかでいいからリスペクトを持って接してもらいたいよね。

玄関へ歩く。

207 男

大した頼みじゃないでしょ？ 普通のことだよ。つまりさ。僕は家具でもぜんまい仕掛けの人形でもない。僕は人間なの。人間らしく接してもらって当然でしょ。ゴミみたいに捨てるのはなしだよ。客のお楽しみのためにコスプレするのはいいけど、僕にも感情はあるんだよ、って言ってるわけ。(フィリップに) 会えてよかった。

出ていく。間。雨音だけ。

208 オリヴァー
209 フィリップ

人っていろいろ。
行かないや。

210 オリヴァー

一杯だけ。

フィリップは仕方なくグラスを受け取る。

211 オリヴァー

座って。五分。そしたら行って。

二人は座る。間。

212 オリヴァー
213 フィリップ

今朝シルヴィアと電話で話してね。慰めてくれた。ありがたい。
元気なの？

214 オリヴァー シルヴィア？うん、シルヴィアは元気。「土曜日に寄るね、マリオといっしょに。」って。
プライド行こうよ。楽しもう。」って。

215 フィリップ プライド？

216 オリヴァー 土曜日のゲイ・プライド。僕は……「気が向くかわからない」って言った。「フィリップは
出た。もしかしたら……戻ってこないかも」って。

217 フィリップ 戻らないよ、オリヴァー。

218 オリヴァー だからそう言った。「ねえシルヴィア、たぶんフィリップは戻ってこないよ」って。「でも
さ、引きこもってもしようがないよ」って、シルヴィアが。「いじけてんじゃないよ。連
れ出してあげる。そとへ。元気づけてあげる」って。

219 フィリップ 何て答えたの？

220 オリヴァー オカマだらけの公園に行っても、大して元気にはなれないよって。

間。

221 オリヴァー あいつのことは好きじゃないよ、フィリップ。こないだのアメリカ人。愛してない。
222 フィリップ その話はしたくない。

223 オリヴァー あれは愛じゃない。君のことは愛してる。

224 フィリップ もう行く。

225 オリヴァー だめ。

間。

226 オリヴァー オッケー。こういうことなんだ。自分でもわからないことがあって。わかりたいけど、わ
からない。何が僕のなかにある、ってゆーか。僕のDNAのなかに。

227 フィリップ なんなんだよ。
 228 オリヴァー 君の場合はちがう。君の場合は愛なんだ。
 229 フィリップ 俺にうそをついた。
 230 オリヴァー さっきのは何でもない。べつのもの。わかるでしょ。
 231 フィリップ じゃあなんでやるんだよ？
 232 オリヴァー 必要だから。
 233 フィリップ 俺にうそをついた。
 234 オリヴァー わかつてる。
 235 フィリップ 何度も何度も。
 236 オリヴァー うん。
 237 フィリップ うそばっかついて。うそで固めた一年半。
 238 オリヴァー 出会ったときのこと覚えてる？
 239 フィリップ もう君って人間がわかんない。
 240 オリヴァー あのパーティーで。
 241 フィリップ 君って人間が全然わかんない。
 242 オリヴァー シルヴィアのパーティーで。
 243 フィリップ 決まってるんだろ、覚えてるよ。
 244 オリヴァー シルヴィアは僕たちが合うってわかってた。お互い好きになるって。「写真家さんがいてね。」って言われて。「いつも旅してるの。きつと気に入るよ」って。
 245 フィリップ もう行かないと。
 246 オリヴァー 君はイスラエルから戻ったとこで。
 247 フィリップ ヨルダン川西岸。
 248 オリヴァー そう……
 249 フィリップ で？

250 オリヴァー
251 フィリップ
で僕たちしゃべった。その旅行のこと。撮ってきた写真のこと。
なんでいまその話になるんだよ？

252 オリヴァー
253 フィリップ
どうなったのになって、あの女性。
どの女性？

254 オリヴァー
255 フィリップ
そのとき話してた人。写真に撮った人。パレスチナの女性。
オリヴァー。

256 オリヴァー
一時間は語ってくれた。あんなに黒い瞳は見たことない、あんなに何かを求めている瞳はつて。

257 フィリップ
258 オリヴァー
一体何なんだよ。
その人の息子が死んだんだって。

259 フィリップ
何だってその話になるんだよ？
僕訊いたでしょ、その瞳は何を求めてたのかって。

260 オリヴァー
261 フィリップ
で？
したら君は、尊厳だよって、つまり聞いてもらうこと。返事は求めてない。ただ聞いて

262 オリヴァー
263 フィリップ
もらうこと。聞いてもらうことで生まれる尊厳。声をもつ権利。
なんなんだよ。

264 オリヴァー
あのときだよ、君のなかの何かに気づいたのは。

間。

265 フィリップ
帰る。

266 オリヴァー
君とのつながりを感じた。あそこで。パーティーで。そのあとここでも、二人で帰ってき
たとき。それにいまでも、いまでも感じる。いまでも感じるんだよ、フィリップ。

間。

267 オリヴァー
268 フィリップ
269 オリヴァー
270 フィリップ
そういうの、めったにないと思う。

君はあばずれだ、オリヴァー。頭悪すぎるあばずれだ。

268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1196
1197
1198
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1270
1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1430
1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1480
1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1496
1497
1498
1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1518
1519
1520
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1550
1551
1552
1553
1554
1555
1556
1557
1558
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1569
1570
1571
1572
1573
1574
1575
1576
1577
1578
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
1586
1587
1588
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1596
1597
1598
1599
1600
1601
1602
1603
1604
1605
1606
1607
1608
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1626
1627
1628
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1696
1697
1698
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
1717
1718
1719
1720
1721
1722
1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
1738
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
1759
1760
1761
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1810
1811
1812
1813
1814
1815
1816
1817
1818
1819
1820
1821
1822
1823
1824
1825
1826
1827
1828
1829
1830
1831
1832
1833
1834
1835
1836
1837
1838
1839
1840
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848
1849
1850
1851
1852
1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2050
2051
2052
2053
2054
2055
2056
2057
2058
2059
2060
2061
2062
2063
2064
2065
2066
2067
2068
2069
2070
2071
2072
2073
2074
2075
2076
2077
2078
2079
2080
2081
2082
2083
2084
2085
2086
2087
2088
2089
2090
2091
2092
2093
2094
2095
2096
2097
2098
2099
2100
2101
2102
2103
2104
2105
2106
2107
2108
2109
2110
2111
2112
2113
2114
2115
2116
2117
2118
2119
2120
2121
2122
2123
2124
2125
2126
2127
2128
2129
2130
2131
2132
2133
2134
2135
2136
2137
2138
2139
2140
2141
2142
2143
2144
2145
2146
2147
2148
2149
2150
2151
2152
2153
2154
2155
2156
2157
2158
2159
2160
2161
2162
2163
2164
2165
2166
2167
2168
2169
2170
2171
2172
2173
2174
2175
2176
2177
2178
2179
2180
2181
2182
2183
2184
2185
2186
2187
2188
2189
2190
2191
2192
2193
2194
2195
2196
2197
2198
2199
2200
2201
2202
2203
2204
2205
2206
2207
2208
2209
2210
2211
2212
2213
2214
2215
2216
2217
2218
2219
2220
2221
2222
2223
2224
2225
2226
2227
2228
2229
2230
2231
2232
2233
2234
2235
2236
2237
2238
2239
2240
2241
2242
2243
2244
2245
2246
2247
2248
2249
2250
2251
2252
2253
2254
2255
2256
2257
2258
2259
2260
2261
2262
2263
2264
2265
2266
2267
2268
2269
2270
2271
2272
2273
2274
2275
2276
2277
2278
2279
2280
2281
2282
2283
2284
2285
2286
2287
2288
2289
2290
2291
2292
2293
2294
2295
2296
2297
2298
2299
2300
2301
2302
2303
2304
2305
2306
2307
2308
2309
2310
2311
2312
2313
2314
2315
2316
2317
2318
2319
2320
2321
2322
2323
2324
2325
2326
2327
2328
2329
2330
2331
2332
2333
2334
2335
2336
2337
2338
2339
2340
2341
2342
2343
2344
2345
2346
2347
2348
2349
2350
2351
2352
2353
2354
2355
2356
2357
2358
2359
2360
2361
2362
2363
2364
2365
2366
2367
2368
2369
2370
2371
2372
2373
2374
2375
2376
2377
2378
2379
2380
2381
2382
2383
2384
2385
2386
2387
2388
2389
2390
2391
2392
2393
2394
2395
2396
2397
2398
2399
2400
2401
2402
2403
2404
2405
2406
2407
2408
2409
2410
2411
2412
2413
2414
2415
2416
2417
2418
2419
2420
2421
2422

284 オリヴァー
285 フィリップ

真っ暗だったから。
「顔はほとんど見えなかった。」そう言えば気休めになるとでも思った？

間。

286 フィリップ

でも俺はね、それで落ち込むんだよ。そう。そういうこと。だからもうつき合えない。落ち込むんだよ。

287 オリヴァー

落ち込む？

288 フィリップ

考えてはみたよ。俺がおかしいのかもしれないと思った。俺がお堅すぎるんだろ。潔癖で。わかんない。出家でもしたほうがいいんだよな。相手の顔は見えなかったんだ、何度も考えた。しゃぶったかもしれない、だけど……

289 オリヴァー

フィリップ――

290 フィリップ

しゃぶったかもしれない、だけど、顔は見えなかったんだから。たぶん問題は俺にあるんだよな。オリヴァーはデートしてるんじゃない、いちやついてるわけでも、相手とバカンスに行こうとしてるわけでもない、公園でしゃぶり合ってるだけ。だけど俺はヤなんだよ。君の問題じゃないよ。

291 オリヴァー
292 フィリップ

どうせ男どうしだもんな、って考えた。みんな言うよね？ 男どうしだからだ。ゲイだからじゃない。男だから。男だからしょうがない。

293 オリヴァー

たしかにみんな言うね。

294 フィリップ

だけど俺には自分の感情しかわからない。あの晩ブリュッセルから戻ったとき、話聞かされたあと、ベッドに寝転んで天井見てた。あんな孤独を感じたのは生まれてはじめてだったよ。

295 オリヴァー

ごめん。

間。

296 オリヴァー シルヴィア、あの仕事取ったって。

297 フィリップ 何の仕事？

298 オリヴァー 応募した仕事。シェイクスピアの。チャンスだって言ってた。主役。ヴァイオラ。『十二夜』の。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで。

299 フィリップ さすがだね。

300 オリヴァー それからマリオ。イタリア人の彼氏。いい感じみたい。ラブラブなんだ。ちゃんとした男だって。しかもすごく、ものすごくストリート。

301 フィリップ よかった。

間。

302 オリヴァー 自分でもどういふことかわからなくて、フィリップ。何か、僕の名前が。何となく誰かが僕を名前で呼んでる気がする。

303 フィリップ いったい何言ってるの？

304 オリヴァー その名前に反応しちゃうんだ。こないだの夜みたいに。僕、角のゲイバーの前を歩いてて。ああそう。

305 フィリップ あの店の前を歩いてて考えてた、帰んなきゃ、仕事しなきゃ。デイリー・メールの記事書かなきゃ、なんだろ。世界の終わりは近いとか、それ系のこととか。そしたら声がして、僕の名前を呼んでるみたいで。

307 フィリップ 名前？

308 オリヴァー その声は、僕の名前を知ってるみたいで。だから僕はなかに入った。だってその声が僕の名前を呼んでるから。二杯飲んだ。そしたら一人、男がいて……ハンサムでも何でもない。

実際、思い出してみると、激しくブスなほうだった。ビールくさいし。二メートル離れてもにおってくる。口臭がぶわーっと。しかも変な目つきでこっちを見る、僕の名前を知ってるみたい。ちょっと酔っててなめるような目つき……ほんとなめるような、うわー、マジキモいって思ったつぎの瞬間、僕となり立って話を聞いている、結婚してるとか、奥さんは一週間実家に帰ってるとか、でなんかそいつ、僕に話しながら自分の股間揉んで……

最後まで聞きたいとは思わない。

309 フィリップ
310 オリヴァー
気づいたら二人でトイレの個室にいた。僕はしゃがんだ。

間。

311 フィリップ
ごちそうさま。

312 オリヴァー
中毒だ、って言おうとしてる。

313 フィリップ
中毒。

間。

314 オリヴァー
まだ一度も話してないことがあって。

315 フィリップ
やっぱり真実は出し惜しみしてほしい。

316 オリヴァー
もつと若いころに起きたこと。昔、たしか十七歳かそれぐらい、おばさんの家に泊まっていたとき。お母さんのお姉さん。君も会ったでしょ。

317 フィリップ
ああ。

318 オリヴァー
女の人が出来てきて。おばさんの友達の。僕は出かけるとこだった。おばさんからその人紹介されて、はじめましてとか言って、走って出かけた。でもすぐ忘れものに気がつい

て。セーターかなんか。走って家のなかに戻ったところで気がついた、二人が——おばさんとその友達が——僕の話をしてたんだ。僕が戻った音には気づいてない。僕、耳を澄ましてみた。全部は聞こえないんだけど——けど、おばさんの声が聞こえてきて、「あの子、いい子だけどちよつとずれててね。」実際には、こんなよう、なことじゃない。一字一句いまのとおり。「あの子、いい子だけどちよつとずれててね。」しかも変なのは——言う前から何となくわかったのね、おばさんの言おうとしてること、前にもおばさんがその言葉を口にしたみたい、おばさんがそれを言ったのとそれを言うってわかったのが結びついてるってゆーか。同時に起きた。「あの子、いい子だけどちよつとずれててね。」

間。

319 フィリップ 行かないと。

320 オリヴァー うん。

321 フィリップ もういられない。

322 オリヴァー うん。そうだね。

323 フィリップ 君のこと、これからも大切に思ってる。

324 オリヴァー ありがとう。

325 フィリップ でもその部分は……君がその、中毒って言うてる部分は。俺には無理。

326 オリヴァー うん。

間。

327 フィリップ じゃあ。

328 オリヴァー うん。だね。じゃあ。

間。フィリップは立ち上がる。スニーカーを持つ。

329 フィリップ ごめん。本当に。

330 オリヴァー 行かないで。

331 フィリップ 行かないと。

フィリップは玄関へ向かう。立ち止まり、オリヴァーのほうを向く。

332 フィリップ

いまだにわかんない、どうしてここまで引き延ばしてきたのか。ここに来る途中もずっと考えてた。知らなかったわけでもないのに。なのにずっと……ずっと俺は頑張った。何かを信じてた。君を。わかんない。信じてた。君をわかってるつもりになってた、ってことだと思う。

フィリップ出ていく。オリヴァーは一人、部屋に残される。立ち上がってスコッチのところへ行き、自分の分を一杯注ぐ。そしてふと動作を止める。何か身ぶり——片手を頭へやったり、首を垂れたり——孤独を表わす身ぶりである。

照明のスイッチの一つへ行き、明かりを消す。薄明かりのなか、ベッドルームへ通じるドアからシルヴィアが現われる。ガウンを着ている。部屋は前の場の状態に戻る。オリヴァーはゆっくり静かに去り、シルヴィアの出てきた部屋に入る。

第3場

一九五八年

シルヴィアがやってきて、ソファに座る。数秒後にフィリップが登場する。彼もまたパジャマとガウンを着ている。

1 フィリップ
ここにいたんだ。

2 シルヴィア
あなた。

3 フィリップ
目を覚ますと。となりにいないから。

4 シルヴィア
夢を見たの。

5 フィリップ
また気色の悪い夢？

6 シルヴィア
そう。

7 フィリップ
セルビア料理が並んでる。

8 シルヴィア
たぶんね。

フィリップは彼女のとなりに腰かける。二人は数秒、黙ったまま座っている。

9 シルヴィア
今夜は楽しかった？

10 フィリップ
実に楽しい夜だった。

11 シルヴィア
本当に？

12 フィリップ
ちよつと酔っ払った、あのひどいワインのせいだな。

13 シルヴィア
三人ともよ。

14 フィリップ
でも申し分のない夜だった。

間。

15 シルヴィア あなた無口だったわね。

16 フィリップ 僕が？

17 シルヴィア はじめはちがった。食事が始まったときは。

18 フィリップ 僕はべつに――

19 シルヴィア それまでおしゃべりだったもの。上機嫌で。でも食事中に無口になった。

20 フィリップ 無口だと思ったなら、謝るよ。

21 シルヴィア そうじゃないの。責めてるんじゃない。ただの観察。

22 フィリップ 観察？

23 シルヴィア 大したことじゃないの……ちよっぴりふさいでるような気がしただけ。憂鬱そうなの。

24 フィリップ それは大げさだな。

25 シルヴィア 気になることでもあるのかしらって。

26 フィリップ 聞いてただけだよ。出る幕じゃないような気がしてね、でも僕のせいで白けたのなら謝るよ。

27 シルヴィア そんなじゃないの。

28 フィリップ そう。

29 シルヴィア 何も言わなきゃよかった。

間。

30 シルヴィア じゃあ気に入っただのね、彼のこと？

31 フィリップ 誰のこと？

32 シルヴィア オリヴァーよ、もちろん。

33 フィリップ いいやつみたいだ。

34 シルヴィア
35 フィリップ
36 シルヴィア
37 フィリップ
38 シルヴィア
39 フィリップ
40 シルヴィア
41 フィリップ
42 シルヴィア
43 フィリップ
44 シルヴィア
45 フィリップ
46 シルヴィア
47 フィリップ
48 シルヴィア
49 フィリップ
50 シルヴィア
51 フィリップ
52 シルヴィア
53 フィリップ

実際そうでしょう？

お互い共通点が多いかどうかは疑問だけど、ごくまともな男だよ。

なぜそんなことを言うの？

ごくまともな男ってこと？

違う、なぜあまり共通点がないなんて言うの？

ないから。それはまあはつきりしてた。

気が合うと思ったのに。

だってしょうがないだろう？ 相手は作家だし。とても知的で外向的、そうだろう？

じゃ何、あなたは……

まあ、似ても似つかない。芸術的センスのかけらもない。

そうかしら。

とにかく、僕が彼をどう思おうといいだろう？ 要は君たちが意気投合すればいい、大切なのはそれだけだ。

わたし、二人に仲よくなってほしくて。

それに仕事も、もちろん。大事だよ。

ええ。

君たちは、仕事について言えば、ちゃんとお互いを理解し合ってるらしい、それが肝心だ。

そうね。

だから僕が彼をどう思おうと関係ない。

いえ、わたしそこまで。

仕事が第一だ。

間。

54 シルヴィア
55 フィリップ
まるで毛嫌いしてるみたい。
異議あり。

56 シルヴィア
とことん嫌ってるみたい。

57 フィリップ
どう言っても、わかってもらえないんだね？

58 シルヴィア
オリヴァーがかわいそう。

59 フィリップ
彼を好きになることがどうしてそんなに大切なんだ？

60 シルヴィア
きっと気を悪くする。

61 フィリップ
どうしてそんなに大切なんだ？

62 シルヴィア
あなたが毛嫌いしてるんじゃないかと思ったら。

63 フィリップ
また大げさなことを。

64 シルヴィア
忌み嫌ってるって。

65 フィリップ
どうしてそんなに大切なんだ？

間。

66 フィリップ
物腰がね、それだけだよ。

67 シルヴィア
「物腰」？

68 フィリップ
それだけ。

69 シルヴィア
どんな「物腰」？どういう意味、「物腰」って？

70 フィリップ
はつきりとは言えない。

71 シルヴィア
どんな「物腰」？

72 フィリップ
わからない。ただ物腰が。

73 シルヴィア
どういう意味？

74 フィリップ
とにかく僕たちにはあまり共通点がない。

間。

75 フィリップ
君はどうかかわからないけど、すごく、すごく疲れたよ。

間。

76 シルヴィア
わたしね、あなたのことを考えるの、ときどき。

77 フィリップ
それは心強い。

78 シルヴィア
ちがうの、あなたが仕事をしているときに考えるの。昼間、ここにいて。この部屋に座って、お茶を飲んだりラジオを聴いたりしながら、仕事をしているあなたのことを考えるの。あなたは茶色のスーツで、大きなアパートの部屋のすみにいる、お客さんは部屋を見て回っている。そしてあなたは大きなドアに全部鍵をかけて、とぼとぼと会社に戻る。

79 フィリップ
なんて妙なことを。

80 シルヴィア
でわたし思うの、孤独なんだわって。フィリップはきつと孤独なんだわ。

81 フィリップ
なんて妙なことを言うんだ、そんなおかしいこと。

82 シルヴィア
今晩言ってたでしょう、仕事に幸せを感じない、オリヴァーとわたしがいやらしいって。あれは悲しかった。

83 フィリップ
ああ、あれ。

84 シルヴィア
だから考えたの、あなたのことを、そして何があなたを幸せにするのか。

85 フィリップ
僕のことには心配いらないよ。

86 シルヴィア
そしてどんなに辛いだろうって、それが手に入らないとしたら。あなたを心から幸せにするものをその手でつかめないとしたら。僕のことには心配いらない。

87 フィリップ

88 シルヴィア それより悲しいことってある？
89 フィリップ 大げさだって。
90 シルヴィア そんな人生を生きるなんて？
91 フィリップ 君がいれば幸せだよ。
92 シルヴィア それにもし、マースデン先生が正しいとしても――
93 フィリップ なあ。
94 シルヴィア もし理由はなくても――
95 フィリップ だからもうつくらないことに――
96 シルヴィア もしつくれるとしても、つくるとしても――
97 フィリップ シルヴィア。
98 シルヴィア わたし思うの、それで――
99 フィリップ だからもうつくらないって。
100 シルヴィア それで何か変わるんだろうかって。

間。

101 シルヴィア 子供を持てば変わるのか。そのことが。

再び間。フィリップは立ち上がる。

102 フィリップ ワインの飲みすぎだよ。
103 シルヴィア 一度も話したことないでしょう、このこと。
104 フィリップ もうベッドに戻るよ。
105 シルヴィア お願いだから。

106 フィリップ 疲れてる。明日も一日忙しいし。
107 シルヴィア お願い、待って。すこしだけ。
108 フィリップ 七時には起きないと。
109 シルヴィア いて。

間。

110 シルヴィア お願い、いて。

間。

111 シルヴィア わたしかえって不安になったの、マースデン先生に子供ができない理由は見当たらないって言われたとき。先生は頑張りさえすればって感じだった……

112 フィリップ もう頼むよ、シルヴィア……

113 シルヴィア でもあのとき考え始めたの、わたしどうしてそこまでほしいのか。子供が。どうしてそこまで大事なのか。そこまで必死なのか。ときどき、全身で祈ったわ。ベッドであなたのとなりに寝ながら全身で祈った、感じないか……ちよっぴりでいい。芽生えてこないか。体のなかに新しい命が。

114 フィリップ もう頼むから……

115 シルヴィア だってそれは自然なこと、女だもの。母親になるのは。だから、祈って祈って祈った。

116 フィリップ 何を言ってるんだ？

117 シルヴィア でもそのうち気づいたの、それだけじゃないって。わたしが子供をほしかったのは二人でいるのがこわかったからなの。

間。

118 シルヴィア あなたに黙ってたことがあるの。

119 フィリップ もう理解できない。

120 シルヴィア 覚えてる、わたしが共演したあの俳優？

121 フィリップ いまはいい。そういう話し方をするなら。

122 シルヴィア リチャードって名前よ。リチャード・コーヴェリー。

123 フィリップ たまに君のことが理解できない。

124 シルヴィア 『桜の園』で共演した。観にきてくれたでしょう。

125 フィリップ そいつが何？

126 シルヴィア 背が高くて色白の。エピソードの役。

127 フィリップ その芝居は覚えてる。

128 シルヴィア あなた会ってるわ。夜、芝居がはねて、いっしょに飲みに行ったでしょう、あの小さなパ
ブに。

129 フィリップ どうしていまさらそんな話を？

130 シルヴィア わたし彼が好きだった。やさしい人だった。変わってて引っ込み思案だけど。でもやさ
しくて。

いったん口をつぐむ。

131 シルヴィア あなたはあまり好きじゃなかった。覚えてる、好きじゃないって言ってた。

132 フィリップ 何年も前だろう。そいつと会って一杯飲んだ。ほかにも役者が大勢いた。ほとんど思い
出せない。どうしていきなり大事なことになるんだよ、僕がそいつをどう思うかなんて？
133 シルヴィア 彼に腹を立ててた。言ってたわ、たしかあなた言ってた、「不愉快なやつだ」って。

134 本当に思い出せない。

135 「あいつ不愉快だ」って。

136 何だってそんな話を？

137 物腰のことも言ってた。今晚のオリヴァーのことと同じ。

138 こんな会話をする意味がわからない。とにかくとても疲れた。

139 三日前にタイムズの記事で読んだの、彼自殺したって。そのときはあなたに言わなかった。
理由はわからない。でも言わなかった。

140 そう、それは気の毒に。

141 覚えていたからかもしれないわ、あなたが好きじゃなかったこと。彼のせいでなぜか気分
を害したこと。

142 そのことがそんなに気になるのか。

143 首を吊ったの。スキャンダルがあつて。裁判沙汰よ。猥褻行為とか、その手のこと。
なるほど。

144 たぶん同性愛者だったの。リチャード・コーヴェリーはたぶん同性愛者だったの。

間。

146 記事を読んで考えた、あの夜のこと。なぜあなたがあんなに嫌ってるように見えたか。

147 そいつのことはほとんど思い出せない。君の印象にはずっと残ってるようだけど、僕には
ほとんど思い出せない。自ら命を絶ったのは気の毒だし、君がその件で動揺してるのも気
の毒だけど、僕はほとんど会ったこともないんだ。

148 どこがそんなに気に食わなかったの？

149 シルヴィア
150 フィリップ
ああいう男って不愉快なところがあるだろう。女みたいで。思い出したよ、あいつはあか

らさまに僕を見た。

見ていたとしても、そうだとすると、どうしてそこまで不快に思うの？

こんな話馬鹿げてる。わざと怒らせようとしてるのか。

なぜリチャード・コーヴェリーを毛嫌いするのかわからなかった。だからあなたには言わなかった。

素晴らしい。君は僕を責めるんだ、ひねくれてる、死んだのは僕の責任ってわけか、たった一度、二十分ほどしか会っていない男なのに。

責めてなんかいない、フィリップ。訊いてるだけ。

とにかく、本当に心配だよ。どうやらまたぶり返してる。

ごめんなさい、そう感じたなら。

あのころと同じ話し方だ、どきっとするぐらい、デヴォンに行く前と。

病氣。そう呼ぶことに決めたでしょう？ わたしの病氣。

話はすんだ？

まるで重いインフルエンザ。

ほかに話したいことは？ もう行ってもいいかな？

無理に引き留めたつもりはなかった。

いてくれて君が頼んだんだ。どう見ても躍起になってた、その奇天烈で、奇妙な考えを伝えようと、それがすんだかどうか僕は単純に訊いてるだけだ。

オリヴァーはリチャード・コーヴェリーと同じ意味で不愉快だったの？

オリヴァー・ヘンショを同性愛者と思うかってことなら、本当にわからない。考えてみたこともない。彼の私生活なんて僕には関係ないことだし君にも関係ないだろう。僕はこう考えることにする、君の様子が今晩すこしおかしいのは、コーヴェリーって男が死んで、動揺しているからだ。それと、ワインを少し飲みすぎたのかもしれない、それで多少は納得できる、すさまじい不条理としか言えないこの状況にも。今度こそ失礼して、本当

166 シルヴィア
167 フィリップ
168 シルヴィア

にベッドに戻らないと。

おやすみなさい、フィリップ。

いっしょにベッドへおいで。疲れてるだろう。

もうすこししたら。

フィリップが退場し、シルヴィアが一人残される。数秒経ち、彼女は立ち上がる。彼に続いて寝室に入ろうとするが、そこでふと身ぶり——前場終わりのオリヴァーの身ぶりに呼応している。苦悩。部屋を出る。

第4場

二〇〇八年

オリヴァーがアームチェアに手足を投げ出して座っており、まだガウン姿である。脇にはほとんど空になったスコッチのボトルとグラス。照明は薄暗い。テレビがついており、「ビッグ・ブラザー」か、それに似た現代の番組の音が部屋じゅうに響く。するとドアをノックする音。オリヴァーは微動だにしない。ノックの音が大きく、しつこくなる。ようやくオリヴァーはドアへ這っていき、開ける。シルヴィアが登場する。食料品を一袋持っている。

1 シルヴィア

ぎげんなよ。

2 オリヴァー

こちらこそ会えてうれしい。

3 シルヴィア

手首切ってたらどうしようと思った。

4 オリヴァー

ことあるごとに言ってきたでしょ、自分を抹殺する道を選ぶとしたら有毒ガスだって。

シルヴィア、オリヴァーの脇をかすめて通り、キッチンへ消える。つぎのいくつかの台詞は舞台のそとで言う。

5 シルヴィア

持ち時間十五分。

6 オリヴァー

ほんと時間に寛容。親友でよかったー。

7 シルヴィア

マリオが空港に着いたとこなの。これからデート。それからお泊まり。いかにもだけど、さみしかったから。

8 オリヴァー

素敵。

9 シルヴィア

食料買ってきたよ。アボカドのムース。オーガニックのフエタチーズ。マダガスカル・バナナのヨーグルト。基本のキ。

10 オリヴァー ありがと、ママ。
11 シルヴィア ビールもう。
12 オリヴァー ご自由に。

彼女がビールを手にキッチンのドアから現われる。

13 シルヴィア あんたウンコみたい。
14 オリヴァー 笑える、屋根裏の肖像画が僕の身代わりになってくれると思ってたのに。
15 シルヴィア 何があったの？

間。

16 オリヴァー フィリップ、僕のせいで落ち込むんだって。
17 シルヴィア あんたのせいで落ち込む。
18 オリヴァー ゆきずりのセックスとか。そのせいで。
19 シルヴィア なるほど。
20 オリヴァー だから僕、それはべつものだよって言った。つまり、いっしょにいるときは……フィリップと二人のときはちがう。けどほかのは、公園とかサウナとかネットとか、何でもいい、そういう……

21 シルヴィア 発展場とか。
22 オリヴァー 発展場とか、ご名答、そういうのはべつもの。それは……何てゆーか、それはトイレに行くみたいなものだから。他人連れっただけで。
23 シルヴィア 他人連れでトイレ。
24 オリヴァー そのとおり。

シルヴィアは一瞬黙る。彼女の携帯電話が振動する。

25 シルヴィア
26 オリヴァー
ごめん、おへその下でブルブル言ってる。
うらやましい。

彼女は携帯を取り出し、発信元を確認する。

27 オリヴァー
28 シルヴィア
バジル臭の男？
レイシスト。

彼女は電話に出る。

29 シルヴィア
30 オリヴァー
31 シルヴィア
32 オリヴァー
33 シルヴィア
34 オリヴァー
(電話で) ハーイ。おかえり。どうだった？……
僕からよろしくって。
そう……うん、大丈夫。さみしかった。いまオリヴァーんち。
よろしくって。
オリーがよろしくって。マリオからも。うん。オッケ。すぐすむ。
僕の持ち時間食ってるんだけど。

シルヴィアは、オリヴァーに黙れと言わんばかりに顔をしかめる。

35 シルヴィア
36 オリヴァー
車ないの、地下鉄で行く。(腕時計を見て) 九時には着く。遅くても九時半。
僕の持ち時間食うなって、十五分しかないんだよ。

37 シルヴィア

(オリヴァーに、電話を手でふさぎ) いいからお黙り。

(再び電話で) あ、いいね。おいしそー。じゃあとで——駅着いたら電話する。チャーオ。おかえり。ティアーモ。

電話を切る。

38 オリヴァー

ティアーモ？

39 シルヴィア

うっせー。

40 オリヴァー

いかにもハーレクイン・ロマンス。

間。

41 シルヴィア

オッケ、じゃいまからフィリップの心のなかをのぞいてみる。何があるか当ててあげる

……何が彼を落ち込ませるか。

42 オリヴァー

どうぞ。

43 シルヴィア

オッケ、行くね。

44 オリヴァー

拝聴します。

45 シルヴィア

あなたはいま、公園を歩いています。夜中です。あなたはそこである男を目に留めます。

46 オリヴァー

なるほど。

47 シルヴィア

彼はイケメンです。超イケメンです。すると彼は自分のブツを引っ張り出します。

48 オリヴァー

いいね。

49 シルヴィア

しかもデカイ。巨大です。彼は巨大なブツをブルンと振って、いや、その巨大なブツであ

50 オリヴァー

なたの顔をビンタします。あなたはたまらなくなって——

僕はたまらなくなってその場にしゃがんで満足させてやりたくなります。

51 シルヴィア

あなたはたまらなくなつて、いま端的におつしやった通り、その場にしゃがんで満足させてやりたくになります、でもストップ。ニュース速報。あなたは気づきます。彼について。二、三の事実に。この男はレイシストだ。あるいは十四歳の少年少女にヤクを売っている。それでもあなたはしゃぶりますか？それでも彼を満足させてやりますか？

オリヴァーはいったん口をつぐんで考える。

52 オリヴァー

巨大つて、どれくらい巨大？

53 シルヴィア

真面目に考えて。あなたはしゃぶりますか？

54 オリヴァー

たぶん。

短い間。

55 シルヴィア

わたしはフィリップの味方だね、この件では。

56 オリヴァー

べつに会話とかしない。そいつの世界観認めたりしない。おつしやるとおりホロコーストなんてなかったよね、とか言わない。しゃぶつてやるだけ、そいつに投票するわけじゃない。

57 シルヴィア

全面的にフィリップの味方だね。

58 オリヴァー

とにかく、あんたがいま選んだシナリオは最悪。変なマニアとか赤ん坊殺しとか。何でもいいけど。そんなの例外だよ。だって、男のほとんどは、サウナとかにいる男のほとんどは、あんたや僕と変わんない。だいたいなんでファシスト・マニア選ぶかな？ピアニストで、お金を全部セーブ・ザ・チルドレンに寄付してる人かもしれないじゃん？

59 シルヴィア

かもしれないよ。けど大事なのは——しかもフィリップが落ち込むのはそのせいだと思ふんだけど——大事なのはあんたが知らないってこと。誰だか知らない男のブツをしゃ

60 オリヴァー
ぶってる。
どうでもいいじゃん。

間。

61 オリヴァー
これ、正直に答えなきゃだめなやつ？
できれば。

62 シルヴィア
正直な真実を？

63 オリヴァー
それだけを。

64 シルヴィア
不都合なことでも？

65 オリヴァー
何のための友達よ？

66 シルヴィア
だったら正直な真実は、やるだけじゃない、つまりしゃぶるだけじゃない、かなり好きかも。いまの具体例。あんたのチョイス。かなりそえられる。

67 オリヴァー
やっぱりね。

68 シルヴィア
だってね——ああ、もう、教えるつもりはなかったけど、フィリップが来たとき、ここに男がいて、そいつが、ああもう、どう言えばいいんだ……

69 オリヴァー
言ってみて。

70 シルヴィア
その、ナチスでした。

71 オリヴァー
ナチス？ナチスと呼んだの？

72 シルヴィア
本物のナチスじゃない。

73 オリヴァー
何それ、本物のナチスじゃないって？

74 シルヴィア
ただのごっこ。

75 オリヴァー
ナチスごっこ？

76 シルヴィア
だから、ほら、ネットで会ったの。そいつらいろんなコスチューム持ってて、こっちが選

77 オリヴァー

んで、来てもらって……だから、プレイだよ。

78 シルヴィア

プレイ。

79 オリヴァー

だから、何でもあり。消防士。パイロット。配管工。

80 シルヴィア

でもあんたはナチスを選んだ。

81 オリヴァー

やるじゃんプレイ。ほら、変態系の。本気じゃない。ファンタジーの世界。

82 シルヴィア

オッケ、で。あんたの役は？ そいつはナチスで、あんたは何？ バイキング？

83 オリヴァー

いや、僕は僕。

84 シルヴィア

あんたはあんた？

85 オリヴァー

そう、そいつはナチス、でも僕は僕。

86 シルヴィア

であんたがプレイしてる最中に、そこにフィリップが入ってきた。

87 オリヴァー

みたいな。

88 シルヴィア

「みたいな」？

89 オリヴァー

いや、もうやめてたから。僕からやめた。お酒飲んでただけ。

90 シルヴィア

ナチスとお酒？

91 オリヴァー

そう。そしたらフィリップが。

92 シルヴィア

そりゃまずいよ。

93 オリヴァー

ありがと。知ってる。

間。

94 オリヴァー

昔ゲイ雑誌の文通欄を見てたのね。ずっと昔。フィリップより前。そしたら一人目に留まってさ。こんな感じの——「ゲイ、三十三歳、ノンスモーカー、趣味はボンデージ、疑似レイプ、レザー、ラバー、チェーン、リミング、フェルチング。恋人募集中。」それが僕の人生。

95 シルヴィア でも素敵な相手を見つけたんだよ。
96 オリヴァー どうして選ばなきゃなんないわけ？
97 シルヴィア いいんじゃない。理解してやるならいいんじゃない。

再びシルヴィアの電話の振動が聞こえる。

98 シルヴィア ごめん。また鳴ってる。

テキストメッセージである。彼女は読んでにこりとする。

99 オリヴァー またイタリア人？
100 シルヴィア かもね。ヤベ、行かないきゃ。

オリヴァーは答えない。シルヴィアは立ち上がり、上着を着始める。

101 オリヴァー さっきセバスチャンから電話があつた。例の雑誌にゴーサインが出た——資金ができたって。ゲイ文学にとってこの雑誌は、ギロチンにとってのマリー・アントワネットみたいな存在になるって。広告塔になる。

「文学」？

102 シルヴィア 超ビッグネームがついたみたい。ブリティッシュ・エアウェイズ、BMW、グッチ、ギャツ
103 オリヴァー プ。そういうの。でかいとこばっか。みんなあやかろうとしてる。

104 シルヴィア まあ、ゲイってイケてるし。可処分所得も多いもんね。

105 オリヴァー 僕のアイデアも取り上げてくれる。トム・フォードのインタビュー。ゲイの長者番付。
106 シルヴィア 名前は決まってるの？

107 オリヴァー 名前？
 108 シルヴィア 雑誌の。
 109 オリヴァー 「B L I S S F U L^{スッフル}」。究極の幸せ。
 110 シルヴィア あ、そ。
 111 オリヴァー ほかにもある。セバスチャンが推薦してくれた単発の仕事。若い子向け雑誌の編集長が
 112 シルヴィア 明日会いたいって。おもしろそう。
 113 オリヴァー 朝電話する。
 114 シルヴィア とにかく、順調だよ。拾う神あり。男なんかきれいさっぱり忘れて。忙しくしなきゃ。さ
 115 オリヴァー さもないと？
 116 シルヴィア 沈んじゃう。
 「沈んじゃう」？

間。

117 オリヴァー こんなにひどい状態ってなかった。一度も。マジで。
 118 シルヴィア まあ、いやしてくれるよ。「B L I S S F U L」が。それからもちろん、例の本。
 119 オリヴァー 本？
 120 シルヴィア 本だよバカ、覚えてるでしょ？
 121 オリヴァー ああ、あれ。
 122 シルヴィア たしか小説書いてませんでしたっけ。
 123 オリヴァー それをもち出すところがあるらしい。
 124 シルヴィア 愛。人生。何らかの意味。せめて意味を見出そうとすること。

ドアへ向かう。開ける。

125 シルヴィア また話そ。

126 オリヴァー もうわかんない、自分が何を求めてるか。とにかくまずい。

127 シルヴィア 何が？

128 オリヴァー こわくて。

間。そして――

129 オリヴァー つまり、こんなふうに座って冗談言い合って、でも何が大事かわかんなくなった。それを

見つけなきゃ。さもないと……

130 シルヴィア さもないと何？

131 オリヴァー どうなっちゃうんだろう？

間。

132 オリヴァー どうしても頼みたいことがある。簡単に頼めることじゃない。でも必要だから。これっ

きりにする。二度とない。わかるよね。でも必要だから。

間。

133 シルヴィア ざけんなよ。

134 オリヴァー 泊まってって。今晚だけ。お願い、シルヴィア。

135 シルヴィア 無理。

136 オリヴァー
137 シルヴィア
138 オリヴァー
139 シルヴィア
140 オリヴァー
141 シルヴィア
142 オリヴァー
今回だけ。お願い。お願い。お願い。
だめだよ、オリヴァー。
普段なら頼まない。わかるでしょ。でもいまはどうしても——
やめて、こんなこと。
いまはどうしても自分がこわくて。
自分がこわい？
今晚一人になっちゃうのが。今晚一人でいるのが。

彼女がこれらの言葉を飲み込む間。

フィリップが一九五八年の服装で登場する——亡霊である。シルヴィアやオリヴァーには見えないが、彼の存在はどういうわけか感じられる。陰から現われる。

143 オリヴァー
144 シルヴィア
145 オリヴァー
146 シルヴィア
147 オリヴァー
148 シルヴィア
149 オリヴァー
150 シルヴィア
151 オリヴァー
152 シルヴィア
153 オリヴァー
自分の中のどこかで感じるの……なんか、裏切りを。
裏切り？
そう。
裏切ったの、裏切られたの？
両方。わかんない。両方。
オッケ。深呼吸して。もっぺんはじめから。頑張って理屈を通すの。わかりやすくだよ、そうすれば、もしかししたら、もしかしたら助けてあげられる。
頑張ってんじゃん。
もつと。
何度も同じ場所に戻っちゃう。それを何とかしないと。
同じ場所？
べつに朝目が覚めたら敬虔なクリスチャンとかムスリムとかそういうものになってや

るっていうんじゃない。いきなり頭ツルツルにしてお経唱えたりしない。だけど何かが
必要なんだよ、何かの悟りが。さもないと、ほんと、サイテー、こんなのもたない。

何が？

オリヴァー。

あの声。

どの声？

あの声が――

オリヴァー――

お前はだめだって――

オリヴァー――

お前は愛されない――

オリヴァー――

お前はその程度の人間だって。

間。フィリップは陰のなかに下がる。

マリオに電話する。

ほんとにごめん。

いいよ。

ありがと。ありがと。ありがと。

わたしにはわからない、なんで。どういふわけで――

ほんとにありがと。

あんたは抜け出せないのか。

明日は一日彼といっしょにいてあげて。朝も、昼も、夜も。

173 シルヴィア ありがと。お許しただいて。さすが寛容。
174 オリヴァー いやみはやめて。

間。

175 シルヴィア 「ビール」もう一本もらうよ。
176 オリヴァー 僕が取ってくる。ゆっくりして。僕の家は君の家。
ミーア・ガイサ、トゥヴァ・ガイサ

キッチンへ入る。シルヴィアは座る。

177 シルヴィア わたしこんなこといつまでもできないんだよ。オリー。ここにいてあげるなんて。こんなふうに。よくないもん。お互いにとって。それだけは言っとく。
178 オリヴァー ご恩は忘れません。

間。オリヴァーが引き出しを開け、ボトルの栓を抜く音。

179 シルヴィア 皮肉なのは、マリオが早くあんたに会いたがってること。わたしがいつでも話題にするから。土曜日のプライドに來たいって。マリオはローマのパレードしか行ったことないんだよ。司祭が卵投げてたって言い張んの、でもそれってマリオ流の反カトリックなプロパガンダ。赤ちゃんほしがってるって言ったっけ？ わたし言ったの、「イタリヤのお母さんに会うまではだめ」って。フィロメーナって名前なの。信じられる？ フィロメーナ。でっかい活火山の名前みたい。手づくりのニョッキは死ぬほどうまいだろうけどね。

間。シルヴィアが立ち上がり、キッチンのドアへ向かうと同時に、フィリップが再び

陰から現われ、彼女がいままで座っていた椅子に座る。

180
シルヴィア

だからつまり、あんたが自分で解決するしかない、って言ってるの。

フィリップは想いに沈んだように前を見つめる。ドアをノックする音が聞こえる。彼はしばらく無視する——ノックはしつこく続く。やがてフィリップはゆっくり立ち上がり、ドアのほうへ歩く、と同時にシルヴィアはキッチンへ消える。フィリップがドアを開けると、オリヴァーが一九五八年の服装で立っている。レインコートを着ており、びしょ濡れである。

第5場

一九五八年

1 フィリップ やあ。
2 オリヴァー ごめん。
3 フィリップ ずぶ濡れじゃないか。
4 オリヴァー うん。

間。

5 オリヴァー 来るつもりはなかった。僕たち……
6 フィリップ 僕たち会わないことにしようって。
7 オリヴァー わかつてる。
8 フィリップ 話さないようにしようって。
9 オリヴァー うん。
10 フィリップ 二人で決めたんだ、こんなことよくないって。
11 オリヴァー わかつてる。

間。

12 フィリップ ずぶ濡れじゃないか。
13 オリヴァー ぼうっとしてて。
14 フィリップ びしょびしょだ。
15 オリヴァー 図書館に傘を忘れて。
16 フィリップ とにかく、入ったほうがいい。

オリヴァーは入る。落ち着きがない。

17 オリヴァー
ごめん。

18 フィリップ
シルヴィアはウィンブルドンだ、友達のうちに泊まってる。明日戻る。

19 オリヴァー
知ってる。電話で話した。だから来た。

20 フィリップ
こんなことよくない。

21 オリヴァー
君に話さなきゃいけないんだ、フィリップ。

22 フィリップ
まだ言うことがあるとは知らなかった。

23 オリヴァー
最後にもう一度。そしたらもう迷惑かけない。

間。

24 フィリップ
とにかく、座ったほうがいい。

25 オリヴァー
ありがとう。

互いに向き合って座る。長い間があり、そしてオリヴァーが話し始める。

26 オリヴァー
僕はどうしても……

27 フィリップ
何？

28 オリヴァー
何でもなし。僕は思ったんだ……できれば……

29 フィリップ
できれば何？

間。

30 オリヴァー
公園を歩いてきた。土砂降りだった。うっかりしてた。図書館にいたんだ。何か書こうと。でもだめだった。書けなかった。だから出た。ここに来た。でも傘を忘れた。そう。

31 フィリップ
無理だった……二人で決めたのはわかってる……でも無理だった……

32 オリヴァー
無理って何が？

33 フィリップ
僕は人生ずっと待っていた、何かの確証を、自分は一人じゃないっていう。そう。

34 オリヴァー
それが見つかれば、その確証が見つかれば、君も二度と……僕は二度と——僕は来なきゃならなかった。君に会いに。ごめん。

35 フィリップ
36 オリヴァー
37 フィリップ
勘弁してくれ。

間。

38 オリヴァー
おかしいよ。わかってるつもりになったた。

39 フィリップ
何を？

40 オリヴァー
孤独ってどういうことか。一人でいるって。わかってるつもりになったた。

41 フィリップ
どういう意味？

42 オリヴァー
でもいまは。いまはわかってる。

長い間。

43 フィリップ
何を言おうとしてるんだ？

44 オリヴァー
君を愛してるってこと。

45 フィリップ 頼む、二度と言わないでくれ。馬鹿馬鹿しい。

46 オリヴァー どうしようもない。どうにかできることじゃない。

47 フィリップ 二人で決めたんだ。君は……僕はお願いした、そんな話はしないでくれって。

48 オリヴァー 心から愛してる。

49 フィリップ やめてくれ、そんな言葉。

50 オリヴァー 夜も眠れない。君の顔が浮かんで。君の声が聞こえて。

51 フィリップ やめろ。

52 オリヴァー 二人でいたとき、この前、二人でいたとき、感じなかった？まるで……まるで……感じなかった？——まるで突然、すべてが、あるとき君のすべてが、それにいまだって……

53 フィリップ やめろ。

54 オリヴァー 君が恋しい。

55 フィリップ 出ていってくれ。

56 オリヴァー いや。すこしだけ。頼むからすこしだけいさせて。

間。

57 オリヴァー この四ヶ月で……僕は理解した。

58 フィリップ 理解したって何を？

59 オリヴァー 昔はただの性欲だと思ってた。体の欲求。倒錯だって。

60 フィリップ たしかに倒錯だ。

61 オリヴァー びったりの女の子に出会ったら、結婚したら、子供ができれば、体の欲求は、性的な欲求は止まるだろうって。

62 フィリップ 倒錯だ。

63 オリヴァー 消えるだろう。克服できるだろうって。

64 フィリップ

そのとおり。

65 オリヴァー

でもそこで、君と出会って……

66 フィリップ

克服できる。

67 オリヴァー

それ以上のものだってわかった。

間。

68 オリヴァー

それは自分のすべてだ。捨てられるようなものじゃない。ただの一部分じゃない。

間。

69 オリヴァー

二人でいるとき。二人で会うたび。そのたびいつも。話をするとき。

70 フィリップ

もう終わったことだ。

71 オリヴァー

それ以上のものだって気づいた。徐々にわかった……

72 フィリップ

勘弁してくれよ……

73 オリヴァー

二人の人間のあいだに起きることは神聖なものにもなるんだって。そしてかけがえのないものに。その二人の人間が誰であるかは問題じゃない。

間。

74 オリヴァー

子供のころを思い出す。暗くて、誰にも言えない秘密に気づいてた。自分が何に焦がれているか。自分は何者か。だから夜も眠れなかった。おそろしかった。何もかもが、誰もかれもが、僕に向かって告げていた、それは間違いだって。

75 フィリップ

たしかに間違いだ。

76 オリヴァー 僕もそう思ってた。信じてた、世界じゅうが僕にそう告げるなら、世界が正しいに決まってる。疑うなんて何きまだ？

77 フィリップ 何を言おうとしてるのか僕にはわからない

78 オリヴァー 僕が言ってるのは、君と出会ったとき、君に恋をしたとき……僕にはわかった、それは真実だって。間違っているのは世界だって。僕の気持ちは正直で純粋で善きものだって。

間。

79 オリヴァー こんな場所があった。公園のなかに。男たちが出かける場所。

間。

80 フィリップ 聞きたくない。

81 オリヴァー 僕行ってみた……一人男がいて、そいつが……僕はそいつを知らない。そいつも僕を知らない。ほとんど話もしなかった。一言だけ。お互い顔も見なかった。そのとき……そのときまるで僕はそこにいなかった。二、三分で終わった。

82 フィリップ もう帰ったほうがいい、オリヴァー。

83 オリヴァー でも僕は……でも僕らは……僕らのときはそうじゃない、同じじゃない。なぜってほら、べつのがあったんだ、フィリップ。二人で言葉を交わして何かがわかったと思った、君は何者か。君の恐怖。君の孤独。君の求めるもの。目を見ればわかった、君も僕と同じ、善き人間だって。

84 フィリップ 善き人間？

85 オリヴァー そう、フィリップ、善き人間。善き人間。善き人間。あのときはじめて、いっしょにいて、お互い抱き合っってはじめて感じた、僕にはプライドがあるってこと。僕という人間でいる

ことのプライド。

86 フィリップ

それが僕に話さないといけないこと？

87 オリヴァー

そう思う。話さなきゃいけない、僕らのあいだに起きたことはちがうってこと。僕が行ったあの場所とはちがう。

88 フィリップ

おんなじだ。君は自分を偽ってる。間違ってる。

89 オリヴァー

僕は思った、ああいう男たちのなかには、君も見ればわかるはずだ、ああいう男たちのなかには、あの薄暗がりを徘徊して待ってる男たちのなかには、選んでやってる人間もいる、たぶんたいていはやりたくてやってる、だけどそれは知らないからだ、どこで……どうすれば見つかるか、しかも自分はしよせんそういう人間だって言われているから、自分は暗がりに立って誰かに触るのを、べつの男の肌に触るのを待ってる人間だって、だから自分はそれだけの人間だと思い込んで、だけど彼らが求めているのは、彼らが本当に求めているのはそれ以上のもの、僕らがいま手にしようと思えばできるもの……誰かとの深いつながりなんだ、せめてそこにしがみつくなことができれば。

90 フィリップ

話はすんだ？

91 オリヴァー

だって出会った瞬間から君だけが僕の本当の名前を知っていたように感じたんだ。

92 フィリップ

どういうこと？

93 オリヴァー

僕らは同じ言葉を話しているような。

間。

94 フィリップ

でも僕はそうは感じない、オリヴァー。

95 オリヴァー

本当に？

96 フィリップ

そうだ、オリヴァー。僕はちがう。僕はちがう。僕はちがう。

間。

97 フィリップ

なあ、オリヴァー、僕はシルヴィアを愛してる。シルヴィアも僕を愛してる。僕らは夫婦でお互い愛し合っている。これまでのことは……つまり僕らのあいだに、君と僕のあいだに、オリヴァー、僕ら二人のあいだに起きたことは単なる過ちだった。君が何と呼ぼうとかまわない。一瞬の弱さ。弱さ。それだけだ。

98 オリヴァー

でも君は言ってた――

99 フィリップ

いろいろ言ったかもしれない、オリヴァー、でも残念ながらきつと本気じゃなかったんだ。だって、僕は正気じゃなかった。取りつかれたようだった。ただわかってほしい、僕は君のことを悪く思っていない。うらみもない、悪意もない。愛情だってある。君はまともな男だって信じてる。僕をそのかしたとも、誘惑したとも、悪気があったとも思わない。僕にだって責任はある。二人ともが過ちを犯したんだ。それだけ。君の幸せを祈ってる、オリヴァー。でも何が起きたかを思い出すと……正気を取り戻したいまになって、僕らのあいだに何が起こったか、僕ら二人のあいだに起きたいろんなことを思い出すと、恥じる気持ちでいっぱいになる。吐き気がする。

100 オリヴァー

吐き気？

101 フィリップ

今日は僕を説得しに来たんだろう、僕らがお互いを思う気持ちには、君が僕を思う気持ちには高潔で純粹なものだって。

102 オリヴァー

そうだ。

103 フィリップ

もちろん、友人として思ってくれるのはいい。それは僕も同じだ。君を好きになって尊敬するのはいい、尊敬しようとするのは、友人として。でもそうじゃなくて……君がさっき話していたこと……そういう場所、そういう連中。

104 オリヴァー

彼らは何？

105 フィリップ

そういう場所……さっき雄弁に語ってくれた場所。そいつらは僕とはちがうし僕もそい

つらとはちがう。僕に正直になれと言うなら、オリヴァー、正直に真実を言えってことなら、あいつらには身の毛がよだつ。言いすぎじゃない。君には正直に言わせてもらう。あわれだとは思うけど身の毛がよだつ。見たことはあるよ……実際よく見る。気づいてる。人ごみでもバスでも通りでも、僕は吐き気がする。あいつらの歩き方、人を見る目つき、みんないっしょだ。僕はあいつらとはちがう、オリヴァー。そして君もきつとちがう。だからお互いこのことは水に流さないで。それがいい。絶対にそれがいい。本当に？

106 オリヴァー
107 フィリップ
いつの日か感謝してくれるだろう。理解してくれるだろう、これはある意味、君を守るためだってことを。君自身から。君はきつと理解する。僕なりの妙なやり方だけど、これは僕から君への贈りものだ。別れの贈りもの。

長い間。

108 オリヴァー
帰ったほうがよさそうだ。

109 フィリップ
ああ。

間。

110 オリヴァー
彼女は知ってるよ、フィリップ。

111 フィリップ
知ってるって何を？

112 オリヴァー
全部知ってる。君のこと。彼女は全部知ってるんだ、フィリップ。

113 フィリップ
どういう意味だ？

114 オリヴァー
君が夜眠れずにいるわけを。君の心をかき乱すものを。君が恐れるいろいろなものを。

君の孤独な考えを。だからいまこそ——だってこんな機会は二度とめぐってこない——

いまこそ君も考えないと、なぜ君は彼女の気持ちを踏みにじるのか。何もかも偽って。僕ら二人のことを言ってるんじゃない。僕らのあいだに起きたことじゃない。正反対のことを言ってる——君があるがままの事実を拒絶してるってことだ。

シルヴィアの話はしないでくれ。

どうして？

こんなふうには彼女の話をしたくない。僕らだけで。こうやって。妻のことを話題にしたくない。

僕が軽い気持ちで話しているとでも？シルヴィアのことが心配なんだよ。心から。

その話はしたくない。

でも僕にはわかった、これは彼女が望んだことなんだ。これじゃない。今のこの状況じゃない。僕らのこと。僕らの出会い。彼女が望んだことなんだ。

頭がおかしいよ。

彼女が結びつけたんだ、フィリップ。僕にはわかる、彼女が僕らを結びつけた。

狂ってる。

無意識かもしれない、自分が何をしているか、はつきりとわかっていなかったかもしれない。でも胸に手を当てて誓ってもいい、シルヴィアが僕らを結びつけたんだ。

間。

125 オリヴァー 君が移住を考え始めたのはいつだろう。

126 フィリップ 移住？

127 オリヴァー そう。海外に。言ってたよね。僕らが出会った夜。シルヴィアは言ってた、家じゅうにア

フリカの本があるって。

128 フィリップ なんだってそんな話を？

129
オリヴァー

だから、その夢を見るようになったのはいつだろう？ 十七歳、十八歳、いつ？ もしかすると大人の男になろうとしていたころ。自分自身を見つけたころ。自分が本当は誰なのか、人生に何を求めているのか。大平原、君は思った。アフリカの太平洋。悪い場所じゃない。そこにいる君が見える。この国は狭い。君にはもっと広い場所が必要だ。深呼吸できる場所。だから君は旅立つ。僕には見える。ブライトンより遠くへは行ったことがないって言っていたけれど、僕には見える、君ははるかかなたにいる。冷たい海峡を渡り、地中海を渡り、夢見たアフリカの大地に立ってる。そこで何をしてる？ 農業？ 狩り？ 教師？ きっとそんなことはどうでもいい。そういう場所で、そういう空の下で君はどうとう発見する、自分は何のためにそこにいるのか。ひとりになってはじめて。

130
フィリップ

じゃあ二度と会わないよ。

131
オリヴァー

ああ。

132
フィリップ

それが君の望みなんだね。

133
オリヴァー

お互いにとって必要なことだ。続けること。もとの状態に戻ることに。

134
フィリップ

でも何の意味が？

135
オリヴァー

意味？

136
フィリップ

そんな馬鹿げた、苦痛な人生に何の意味があるんだ、自分に正直になれないなら？ 自分の

137
オリヴァー

芯にあるもののために闘わないなら？

138
フィリップ

わからないよ。わからない。

139
オリヴァー

僕に何かが起きたんだ、フィリップ。戻れないよ。もとの状態には。

140
フィリップ

どういう意味だ？

141
オリヴァー

大丈夫、君が来てくれるとは思ってない。僕はもう何も期待しない。君には何も。

142
フィリップ

悪かった。

143
オリヴァー

君は軟弱だ、フィリップ。

144 フィリップ 僕はべつに……

145 オリヴァー 何？

146 フィリップ だからってべつに……

147 オリヴァー 言って。

148 フィリップ いい。何でもない。

149 オリヴァー 頼むから言って。

150 フィリップ 楽じゃないんだ。楽じゃない。

間。

151 フィリップ 出会わなきゃよかった。シルヴィアが君を連れてこなきゃよかった。

152 オリヴァー 君は誰だ？

153 フィリップ わからない。もうわからない。

154 オリヴァー わかったことなんか一度もない。いまがそれを知るチャンスだった。君には強さが足り

ないんだ。死ねばいいよ。フィリップ。自分が誰だか知らないままで。

155 フィリップ 黙れ。

156 オリヴァー まったく愚かで、哀れな人生だよ。

突然、フィリップはオリヴァーの顔を殴る。反射的な、窮地に追い詰められた動物の反応である。オリヴァーは後ずさるが、フィリップも同じく動揺している。オリヴァーの口からすこし血が出ている。

157 フィリップ ごめん。ああ、こんな、本当にごめん、オリヴァー。本当にごめん。

オリヴァーに近づく。オリヴァーはひるむ。

158 フィリップ 見せて。

オリヴァーは任せる。

159 フィリップ ごめん、本当にごめん、本当に。

160 オリヴァー 心配いらない。大丈夫。

161 フィリップ 本当にごめん。そんなつもりは……本当にごめん……

162 オリヴァー 大丈夫。本当に、大丈夫だから。

するとフィリップは泣き始める。オリヴァーの腕のなかにくずおれ、子供のように泣きじゃくる。

163 フィリップ ごめん、ごめん、ごめん。

164 オリヴァー 心配いらないよ、フィリップ、心配はいらない。

オリヴァーはフィリップをなだめる。そしてキス。オリヴァーはやさしさを保とうとする。フィリップが何かほかのものに取りつかれる——何か差し迫った、攻撃的なものが沸き起こる。

165 オリヴァー 待って、フィリップ、待って。
166 フィリップ いやだ。

もみ合いのようになり、フィリップがオリヴァーをソファの方へ引っ張る——動作はますます乱暴になる。相手と自分の服を引きはがす。

167 オリヴァー

だめだよ、フィリップ。こんなのは。いまは。ここでは。待って。

168 フィリップ

いいじゃないか。いま、ここで。こうなることが望みなんだろう？ 僕にこうなってほしいんだろう？

フィリップは乱暴になっている。オリヴァーを組み敷く。オリヴァーは抵抗する。フィリップはズボンのジッパーを開け、オリヴァーのズボンをどうにか半分ずり下ろす。オリヴァーの背後から挿入する。オリヴァーははじめ抵抗するが、やがて屈服する。フィリップはほどなく絶頂に達して射精し、オーガズムの瞬間、おそろしく苦悶に満ちた解放の叫びを上げる。二人はしばらく床に横たわっている——フィリップは恥にまみれて顔を隠し、オリヴァーも顔を隠す。

とうとうフィリップが立ち上がる。静かに、ていねいに服を着て、部屋を出る。オリヴァーは動かない。横たわったまま、床に顔を伏せている。一分ほどしてフィリップが戻ってくる。自分の酒を注ぎ、座る。タバコに火をつける。いっときが過ぎる。ゆっくりと痛々しく、オリバーは立ち上がり、乱れた服を着直す。完全な静寂のなか、一、二分が過ぎる。

オリヴァーはゆっくり部屋を歩き、コートかけへ向かう。自分のコートを見つけ、それを着る。フィリップのことは見ない。うつむいている。玄関へ向かう。ドアを開けると、立ち止まる。

間。

169
オリヴァー

君のこと、わかってるつもりになった。

部屋を出ると、ドアを閉めて去る。

フィリップは動かない。座ったまま、ウイスキーを飲み、タバコを吸う。
照明が徐々に溶暗する。

第一幕終わり

第6場

二〇〇八年

オフィス。デスクの向こうにピーターが席を取る。ややうさんくさい商売人である。オリヴァーはデスクの向かいに席を取る。

1 ピーター

でセバスチャン・ニコルズに訊いたらさ、「優秀なクイア・ライターを探してるなら、街いちばんのを知ってる」って言うんだよ。これって大丈夫？ つまり、こんな言葉使うのってさ、「クイア」って言葉、大丈夫？ 傷つけたくないからさ。

2 オリヴァー

傷つきませんよ。

3 ピーター

だってわかんねーじゃん？ つまり、自分が正しい言葉使ってるかどうか。てゆーか、いまさらポリコレなんて古いつていうのはわかってる——何だよそれ？ つて——でも俺は好んで人を傷つけるようなやつじゃない。要はさ、何が正しい言葉なんてわかんないってこと。おたくらをクイアって呼ぶのはさ、黒人を「ニ」で始まる言葉で呼ぶのと同じかもって思ったわけよ。仲間内ではいいんだろうけど、でも……

4 オリヴァー

クイアは大丈夫です、クイアは。

5 ピーター

境界線を押し広げる、とにかくそういう話。もしかして見たかな、うちで載せたイラクの記事。

6 オリヴァー

いえ、見逃しました。

7 ピーター

あるガキンチョが戦争から戻って両腕なくしちゃってんの。そいつを一週間追っかけた、日記風ってゆーかき、どんだけ生活が変わったかとかクソほど苦労してるとか、彼女にふられちゃったとか、あとつまんねーことも、日常のこと、A T M使うとか、どっからどっかまでたどり着くとか、めっちゃ感動だよ、つーか、みんなの心のスイッチ押して考えさせる。パワフル。

8 オリヴァー

でしょうね。

9 ピーター

だって人生大事でしょ、オッパイとケツ、オッパイとケツ、おまけ程度にサッカードか、その程度じゃ困るんだよ。一晩で意識高い系の雑誌になろうってわけじゃないけどさ、うちには幅広い読者がいるし、たいてい感度のいいガキンチョなんだ、やつら言うじゃん、力には責任がともなうとか。

10 オリヴァー

言いますね。

11 ピーター

だって要はさ、そういうガキンチョって、たいていセックス大好きなわけ。マジで、たいていのやつはブタともやっちゃうよ。で何が言いたいってさ、「時代は変化してる」ってこと、いや、ほんとだよ、マジで。こないだ夜みんなと遊びに出てさ、一人が、デイヴって名前の、若干クソ野郎だけど悪いやつじゃない、そいつが二、三杯やって、タイに行ってきた話すんの、彼女ホテルに放ったらかして、シャングリラかどっかに泊まってやがんだけど、街歩いてるうちにムラムラしてきて、ありがちでしょ、で気づいたらニューハーフにチンチンしゃぶってもらってたんだって。ニューハーフだぜ。その話にみんなドン引きで「はあ？」って、そしたらデイヴ、「生涯最高のフェラだった」って、みんなからかったり笑ったりしてんだけど、二分経つとビリヤードに戻って忘れてるんだ。十年前なら絶対ない、時代は変化してる、デイヴだって秘密にした。けどさ、いまだき誰が気にすんの？だから、結局のところ、オリヴァー、下品に聞こえたらごめんね、問題あれば遠慮なく言つて。

12 オリヴァー

大丈夫です。

13 ピーター

俺はこう思ってるわけ、押せ押せで行こうぜ、こわいもんなんてない、結局みんな人間なんだし、結婚とかしなくていいじゃんよって。いまこそガキンチョどもに言ってるやないと、そういうので興奮してもオッケーだぜ、ゲイってクールだろとか、自分のなかのホモフォビアとガッツリ向き合え、乗り越えろとか。そこで記事にしたいのが、ゲイのセックス・ライフ、細かいことはいからざっくりと？公共の場所でのセックスとかそういうの、読者がちよっとうらやむようなさ、たとえば、そうだな、公園や公衆トイレに足を踏み入

れてみよう、昼でも夜でもいつでもいい、そしたらそこには超かわいい女の子が勢揃い、ただハメてもらうのを待ってる、どうだこれってすげーだろ？ みたいなさ。ゲイのセックス・ライフをストレートの男たちに。

ゲイのセックスライフをストレートの男たちに。

で、ぜひとも俺がほしいのは、やつらが自分を見出して、同時に「ゲイでもオッケー」つてなる記事。考え方を変えるような。ゲイはクール。そんな感じの。ゲイの男はみんなわかってる、自分が何を求めているか、それをどうやって手に入れるか。あらゆる分野のイノベーター——音楽、ファッション、野外乱交。それを雑誌に載せるだけで——世に出すだけで——読者の意識を変えられる。ガキンチョ向けの雑誌がみんなゲイのセックスを取り上げるわけじゃないからさ。これがはじめに言ってたことよ——バリアをぶち破る。はい。

基本的に俺が言ってるのは、俺のビジネスが社会にとって正しいことと両立できれば、それはいいことなわけ。なかでもバリアをぶち破るっていうのは超大事。おたくらそれに超ふさわしいから。

間。

いやつまり、おたくら権利を求めてめっちゃ闘ったわけじゃん。クソな社会と闘ったんだ。クソほどの無知と。

たしかに。

実はオリヴァー、俺だつてさ、個人的なつながりがあるんだ。いやつまり、ゲイの世界に。ゲイの運動ってゆーかさ。おじさんがいるんだ。

みんないますね。

いや、でもマジで。すげーおじさん。マジかっこいい。お袋の兄貴よ。ハリーおじさん。

14 オリヴァー
15 ピーター

16 オリヴァー
17 ピーター

18 ピーター
19 オリヴァー
20 ピーター
21 オリヴァー
22 ピーター

23 オリヴァー

24 ピーター

マジいい人で。思いやりがあつて。ハエも殺せない。市会議員だった。エイズになっちゃった。

お気の毒です。

脳裏に焼きついてるよ。べったりと。あの日。最後に会ったとき。もう死にかけてた。

そんなとき俺は、えっと？ 十二か十三でさ。お袋が俺と弟を入院先のロイヤル・フリー・ホスピタルに連れてくんだ。特別病棟で医者もなんだかわかってない、いや、エイズなのはわかってたけど初期のころで、つまりよくわかってなかったんだ、うつる病気なのか、どいうやつでうつるのか、だからお袋はグラス捨てたり、おじさんがうちにきたとき使ったやつね、もちろん本人の前じゃなくて帰ってから、アホかと思うけど、当時はよくわかってなかったから。で病室に行くと、ハリーおじさん、変なシートのをかぶってる、なんか特別なシートで、配線とか点滴のチューブとかいろいろ通してあつて。えれーことになってる。人工呼吸器もつないであつた、息もろくにできないから、その音がき、頭やバくなるくらい、ぜえぜえ言つて、いかにも死ぬって音なんだ。見たことねーよ。でちょっと変なのがさ、俺身を乗り出して、状況にちょっとビビってた、お袋が言うんだ、「ハリーおじさんに『こんにちは』でしょ」、でもそれってさ、「ハリーおじさんに『きよなら』でしょ」って意味なわけ、先は長くないってみんな何となくわかってた、だから俺はかがんで、シートのものが邪魔なんだけど、のぞき込んだら。ヤベーよほんと。マジヤベーおじさんの目が。なんつーか、ほかの部分は死にかけてんのに目だけはさ。心ののぞき窓つーか。そういうの。目から愛があふれちゃつて。マジで心つぶれちゃうよ。

間。

25 ピーター

で帰ろうとすると、野郎が一人座ってた、一メートルほど離れて、こっち見てにっこりするもんだから、「誰だよお前？」って感じでさ、だって俺まだ十二歳かそこらだし、よくわ

かんないまま、お袋になんかぐいっと手え引かれて出てきたわけ、であの人誰って訊いたらさ、「あれはハリーおじさんのお友達」って。そのあと知ったんだけど、二人は二十五年間いっしょに暮らしてた。二十五年だぜ。それってめっちゃ長いだろ。つまり、めっちゃマジな関係だよ。だからお袋に訊いた、なんでそれまで会ったことないのか、ハリーおじさんの友達なのにどうしてか、お袋はちゃんと答えてくれなかった。「会ったことがないだけよ」って。人って変だよ。

間。

26 ピーター
そう、それが俺の個人的なつながり。つまり、ゲイの世界との。ハリーおじさん。だから敬意を示したくて。

27 オリヴァー
28 ピーター
ありがとうございます。その、話してください。
だから俺が思うに、オリヴァー、まずはこうやってしゃべれてよかったよ、メールでもうすこしアイデア送る。どんな記事がいいか。でも肝心なのは重くならないこと。そしてちょっと興奮させる。

29 オリヴァー
興奮させる。

30 ピーター
あとカネのほうは大丈夫？

31 オリヴァー
四千で。

32 ピーター
前払いで二千。

33 オリヴァー
はい。

34 ピーター
仕上がったら二千。

35 オリヴァー
わかりました。

暗転。

第7場

一九五八年

公園。ベンチが一脚ある。照明が入るとオリヴァーとシルヴィアがいる。二人は立っている。秋の午後である。

1 シルヴィア 来てくれてありがとう。

2 オリヴァー こちらこそ。久しぶり。

3 シルヴィア 変に思ったかもしれないわね、ここで会おうなんて。公園で。でもこんなに穏やかな陽気だし、すべてがこんなにも……

4 オリヴァー こんなにもきれいだし。

5 シルヴィア それにわたし、そとに出る必要があったの。最近ほとんどどこにいたから。たまに忘れてしまうの、そとに世界が広がってること。ほかに人も人がいること。

6 オリヴァー ここで会うのは素敵だよ。

7 シルヴィア それにフィリップはほとんどどこにいない。忙しいの。急に仕事に追われてしまって。

8 オリヴァー だから出かけるのはいい。

9 シルヴィア 元気そうだね。

10 シルヴィア そう？

間。

11 シルヴィア このあいだ書店の前を通ったの。ウィンドウにわたしたちの本があった。ほんとに誇らしく思えたわ、一瞬。ほんとに、とっても誇らしく。

12 オリヴァー それはそうだよ。

また一緒にやれたらと思うの、オリヴァー。厚かましいことじゃないでしょう？

13 オリヴァー ちっとも。

14 シルヴィア お願ひしてるの、わたし。勇気を振り絞って言ってみた、わたしには大切だったから。

15 オリヴァー もちろん、またいっしょにやろう。

16 シルヴィア がっかりしたんじゃないかしらって。

17 オリヴァー がっかり？

18 シルヴィア ああ、ほら。仕上がったとき、本が無事完成したとき、あなたの期待に届かなかったんじゃないか。がっかりしたんじゃないかって。わたしの仕事に、わたしが果たした役割に。ちっとも。

19 オリヴァー 最初の期待に届かなかったんじゃないかって。

20 シルヴィア そんなふうに考えちゃいけない、決して。僕は最高に満足してる。

21 オリヴァー わたし理由がないか探していたのね、なぜわたしたち長いこと会わなかったか。

22 シルヴィア 僕がとても忙しかったから。

23 オリヴァー それはそう。

24 シルヴィア 間違った印象を与えてしまったなら謝るよ。そんなの真実からは程遠い。

25 オリヴァー ありがとう、おかげで安心した。どこか神経質になっていたのね、そんなはずないって自分に言い聞かせようと。

間。

27 シルヴィア きつとフィリップは、わたしがすっかり狂ってしまったと思ってる。

間。

28 シルヴィア あなたの友情がわたしにはとても大切なの。

29 オリヴァー 大丈夫、シルヴィア？

30 シルヴィア 芝居をやっていたころは、こういうつながりを感じられる人がいた。率直に話せる人がいたの、すごく大事で興味深いことを、もしかすると個人的なことも。ほかの人には話せないこと。フィリップにさえも。フィリップにだけは。

31 オリヴァー 演劇の世界っていうのはね。

32 シルヴィア それからあなたと出会って同じものを感じた。わたしたちはくだらない世界の人間じゃない、愚にもつかないおしゃべりをして、人の尊厳を傷つけたりしない。気心の合う人。

何でも遠慮なく話すことができ、何でも遠慮なく話してくれると思える人。

座る。間。

33 シルヴィア わたし孤独なの。

間。

34 シルヴィア こんなこと言うなんてひどい？

35 オリヴァー ちっとも。

36 シルヴィア だって。結婚してるのよ。わたしは夫と暮らしてる。なのにときどき夜中に目が覚めて、ベッドの上で思うの、なんて孤独なんだろうって。その孤独は毛布のようなもの。心地いい毛布じゃない。もっと暗いもの。重苦しい。かぶると息が詰まりそう。本当にごめんなさい。

37 オリヴァー ごめんなさいって？

38 シルヴィア 呼びつけたこと。うちで何か書いてたんでしよう、せっかく集中していたのに、公園に呼び出されて、狂った女の愚痴を聞かされるなんて。

39 オリヴァー
40 シルヴィア

君は狂ってなんかいないよ、シルヴィア。
なにか疑いをもつことがある。そんなとき人は忘れようとする。どこかでわかってはい
ても、認めてしまうと人生がうそになってしまう。すると……

41 オリヴァー
42 シルヴィア

するとずっと頼りにしていた土台が、歩いていた地面、自分のために建てた家、何もかも、
壁も家具も吸ってる空気も何もかも、現実とは思えなくなる。そして真実にまぎれたうそ
を見分けられなくなる。少なくとも真実ではないとわかっているものを。見せかけの
のを。人生はおそろしい仮面舞踏会のようになる。そのことに耐えられなくなる。

間。ゆつくりと、シルヴィアは鞆のなかの何かを捜し始める。

43 シルヴィア
44 オリヴァー
45 シルヴィア

あなたのものを見つけたの。
僕のもの？
うちで。ポケットから落ちたのね。いつかしらって思ったの。あなたはうちに三回来た。
最初のはじめて来たとき、あなたがフィリップに会えるようわたしたちが招待した日。イ
タリア料理屋に行った夜。そのあと二回。あの最終版の挿絵を見にきた朝、わたしがひど
い風邪をひいて、あなたの部屋に行けなかったとき。それから最後は本の出版パーティー
の夜、そのときはたったの五分、あなたが車で送ってくれて、軽くブランドーを飲んだ。
だからわたしがいるときは三回だけ。当然、三回とも居間にしかいなかったし、お手洗
には行ったでしょうけど、正直それも思い出せない。

ハンドバッグからペンを取り出す。

46 シルヴィア

あなたのペン。すごく大切にしているもの。お姉さんがくれたもの。肘かけ椅子のクッ

シヨンの後ろにあった。寢室の緑の肘かけ椅子。上着から落ちたのね。いつも内ポケットに入れてたでしよう？

うん。そうだね。入れてた。

じゃするっと落ちたのね。

うん。

わたしが母を訪ねていたときかしら。一週間は留守にしたものね？

間。

51 シルヴィア

どうぞ、オリヴァー。あなたのよ。あなたのペン。

オリヴァー受け取る。長い間がある。

52 シルヴィア

わかってちょうだい、わたしはあなたを責めない。本当よ。もちろん傷つくし動揺した、あなたがよりによって……わたし動揺したわ、あなたが……だってあなた、家はあるわけだし、自分の家があるのに、よりによって……笑えるでしょ？ 何よりもそのことに取り乱すなんて。きつとそれしかなかったのね、この件について意外だったことは。あなたがあの場所を選んだこと。おかしい。

間。

53 シルヴィア

それでもね、わたし考えてみたけど、それでもあなたを責めたりしない。うそで固めた日常を、いつもの日常を送っていれば、細かいことはぼやけていくものだから。分別が損なわれていく、ということなのかしら。判断する力が。だから普通の状況なら、あなたは

わざわざあんなやり方でわたしを侮辱したりしない。そう思いたい。

ふと泣き始める。

54 オリヴァー

本当にごめん。

55 シルヴィア

ずっと時間の無駄だった。いまの自分を見るとね、鏡の中の、わたしの顔は、自分を忘れた、忘れられた女の顔なの。

間。

56 シルヴィア

フィリップとはまだ連絡を？

57 オリヴァー

いや。いや、取ってない。

58 シルヴィア

それを選んだのはフィリップ、あなた？

59 オリヴァー

フィリップ。僕が彼なら君と同じことを選んだ。

60 シルヴィア

わたしと同じ？

61 オリヴァー

正直な人生を生きること。

62 シルヴィア

正直な人生。

63 オリヴァー

そう。

間。

64 シルヴィア

あの人幸せだった？

65 オリヴァー

幸せ？

66 シルヴィア

教えて。あの人幸せだった？少なくともその午後は。その朝は。幸せだったの？

67 オリヴァー 僕には……それは……
68 シルヴィア 難しい。難しいでしょうね。
69 オリヴァー うん、僕には……

間。

70 オリヴァー もしかすると一度。ほんの短い時間。ほんのつかの間、フィリップは可能性を垣間見たのかもしれない、つまり……

ためらう。

71 シルヴィア 勇気を持つ。

72 オリヴァー そう。それだよ。

73 シルヴィア それを思うと憤りが込み上げた。あなたたちの幸せ。一日か二日は心底二人を憎んだわ。なぜってたとえ二、三回でも不倫してるあいだ、あなたはほんのつかの間って言ったけれど、そのときあの人は本当の自分になれたんでしょう、わたしといえどもなれなかったものに。あなたの言う垣間見た瞬間に。

間。

74 オリヴァー 本当にごめん。僕は恥ずかしい。

75 シルヴィア でしょうね。

76 オリヴァー わたしが心から願うのは……
うん……

77 シルヴィア

わたしが心から願うのは、あなたが自分の探しているものを見つけること。楽じゃない。

78 オリヴァー

わかってる。あなたも孤独なはずよ。
うん。そうだね。

シルヴィアは行こうとするが、立ち止まる。

79 シルヴィア

あの夜あなたがはじめて来たとき、何かが起きた、そうでしょう？ わたし、感じたもの。あれは何かしら。あの場に立ち込めていた。わたしもそれを感じたい。誰かにそれを感じてもらいたい。さようなら、オリヴァー。

シルヴィアはベンチにオリヴァーを残し、歩き去る。照明が溶暗する。

第8場

二〇〇八年

シルヴィアのアパート。彼女がドアを開けたところ。そこにオリヴァーがいる。口から血が出ている。

1 シルヴィア
ぎげんなよ。

2 オリヴァー
もうそういうあいさつやめてくれる？ いい加減感じわりーよ。
3 シルヴィア
ったく。

4 オリヴァー
そっちのほうがいい。

5 シルヴィア
血が出る。

6 オリヴァー
相変わらず、驚異的な観察力。

7 シルヴィア
あんた何やってんの？

8 オリヴァー
近所にいて。

9 シルヴィア
何があったの？

10 オリヴァー
事故。

11 シルヴィア
事故？

12 オリヴァー
細かい話はあとにしてくれる、お宅が血の海になっちゃうよ？

13 シルヴィア
何したの？

14 オリヴァー
切り傷だよ、たかが。キッチンペーパーで十分です、ミス・ナイチンゲール。

15 シルヴィア
座って。

オリヴァーは座る。シルヴィアはペーパーを取りにキッチンへ駆け込む。

16 オリヴァー
僕のフェアウェル・ツアー。言ってみりゃ差し入れ。大勢いるファンの一人から。でも

ダークな趣味の持ち主でさ。あんたって予言の天才だね、ミス・ノストラダムス。何覚に投票してるやつか知らないけど、なんちゃってリベラルですらない。原始人、そう呼ぶのが正しい。ピンストライプのスーツ着て髭も剃ってるけど、絶対そう。あんなぴかぴかのレースアップ・シューズ見たことないよ。いまだき見た目じゃわかんねーわ。ほら穴から這い出したばかりには見えない。汗のにおいはぎりぎり感知したけど、まろやかなアクア・ディ・ジオの香りに紛れて。

シルヴィアがキッチンペーパーを手を駆け戻る。オリヴァーが鼻をぬぐうよう、すこし渡す。

たしか言ってたよね、このままじゃ人生もたなくなるって。

ちよつと見にいっただけ。

きのうのきょうだよ。

そんな最近？

一週間は我慢すると思ってた。

あんたの説得も街のデカマラの誘惑には勝てなかったんだね。

ったく何があったの？

僕スーツの男に目がなくて。

明らかね。

兆候はあったの。やり始めたら言葉責めがいつもより若干リアルで。

どんな言葉責め？

形容詞の使い方がすごいんだよ。名詞の使い方もうぶっ飛んで、絶句しちゃった。もちろんそれだけじゃないけどね、なかなか言葉返せなかった理由は、さようございますか。

17 シルヴィア
18 オリヴァー
19 シルヴィア
20 オリヴァー
21 シルヴィア
22 オリヴァー
23 シルヴィア
24 オリヴァー
25 シルヴィア
26 オリヴァー
27 シルヴィア
28 オリヴァー
29 シルヴィア

30 オリヴァー

で、絶頂を迎えたとたん、そいつ、僕のことを押してきて。何てゆーか——邪魔だ、急用があるんだみたいな、友達が待っていると、女房連れてディナーとか、スーパ―が閉まるとか。そんなようなこと。ぐっと押されただけ。

31 シルヴィア

血が出てんだよ。

32 オリヴァー

ロレックスだね。なんかじゃらししたもの。上くちびるに残念な角度で入っちゃった。でも押されただけ。パンチじゃない。

33 シルヴィア

なら、いいけどさ。

34 オリヴァー

ゆえに「事故」って言葉を使いました。何が何だかわからないうちに向こうは仕事に戻ってた。

35 シルヴィア

もし気づいてれば、愛車のジャガーでうちまで送ってくれたらうね。

36 オリヴァー

間違いなく。

間。

37 シルヴィア

ぎげんなよ、オリヴァー。

38 オリヴァー

リサーチだよ。

39 シルヴィア

「リサーチ」？

40 オリヴァー

不特定多数とのセックスについての記事。なぜか僕に白羽の矢が。

間。

41 オリヴァー

ゲイの同胞の大群に囲まれるっていえばさ、明日の件だけど。

42 シルヴィア

プライド？

43 オリヴァー

うん。僕、行かない。イタリア人に謝っというて。

44 シルヴィア 来るでしょ。

45 オリヴァー 行かないマジで。一日ベッドで過ごすつもり、傷を癒さないで。

46 シルヴィア フィリップも誘ったよ。

47 オリヴァー うそつき。

48 シルヴィア 彼、寄ろうかかって。わたしのためって言ってたけど。あんたも来るって伝えたよ。かまわないうって、お互い大人だし、何とかなる。そんなようなこと。

49 オリヴァー それ本気で言ってる？

50 シルヴィア なんでわたしがつくそをつく？

51 オリヴァー 容赦なく目的を遂行するタイプだから。

52 シルヴィア フィリップは来る。よかったら来な。それかベッドに引きこもって考えてれば、孤独と死について。

53 オリヴァー それはどうも。

54 シルヴィア 知らせてよ。お弁当の支度があるから。

55 オリヴァー だいたい時代錯誤だよ。ピチピチのTシャツとか羽根飾り背負ったドラァグクイーンとか。何でもいいけど、あれって意味あんの？教えてよ。あれってデモンストレーション、

セレブレーション、それともファッションショー？

56 シルヴィア あまのじゃく。

57 オリヴァー 一万人的おネエが腕の太さ褒め合ったり。マジでだっせーわ。

間。

58 オリヴァー ところできれいじゃん。

59 シルヴィア ありがと。

60 オリヴァー みんなでパーティー？

61 シルヴィア 一人。単数。そのとおり。
62 オリヴァー あっそ。
63 シルヴィア デイナーに来るの。
64 オリヴァー お料理中？
65 シルヴィア そう。
66 オリヴァー いいにおい。
67 シルヴィア ありがと。
68 オリヴァー まさかイタリアンじゃないよね。マンマの料理と比べるよ。あいつらみんなそう。
69 シルヴィア そうなの？
70 オリヴァー イギリスのもんにしときな。冷凍のグリーンピースとかそういうの。
71 シルヴィア そろそろ来るんだけど。
72 オリヴァー 興奮するー。

間。

73 オリヴァー で、他に何か言ってた？
74 シルヴィア フィリップ？
75 オリヴァー ううん、エルトン・ジョン。うん、フィリップ。
76 シルヴィア 本の話をした。
77 オリヴァー 本？
78 シルヴィア いま読んでる本のこと言ってた。何かハンガリーの。
79 オリヴァー でも僕のは何も言ってなかった。
80 シルヴィア 何にも。さっき言ったことだけ。会うのはかまわないって。

間。

81 オリヴァー ぎけんなよ。僕のスイッチの入れ方わかってる。

82 シルヴィア 当然でしょ。

83 オリヴァー 僕が行くってわかってる。

84 シルヴィア 当然でしょ。

85 オリヴァー また会いたい。いっしょにいたい。

86 シルヴィア フィリップは特別だよ。ふところが深くて、正直で、いちずで。

87 オリヴァー 心底思いやりがあって。

88 シルヴィア おまけにハンサム。

間。

89 オリヴァー たまに……

90 シルヴィア 何？

91 オリヴァー こういうのって、ない？

92 シルヴィア どういうの？

93 オリヴァー ちょうど眠りに落ちるとき、夢が始まる直前。それかたぶん目覚めた直後、目はひらいてるけど、意識はまだ夢のなかにいるとき。

94 シルヴィア 何？

95 オリヴァー 人生のはかなさに愕然とすること。はかなさ。気まぐれ。まるで花火。

96 シルヴィア それはある。

97 オリヴァー そういうとき感じるんだよね、たった一つ大事なことは意味を見つけることだって、理由をね、はかなさにビンタ食らわす何かを。自分はここにいたって言うために。存在したん

だ。いたんだって。たぶんその方法は二つしかない——仕事、それから人との関わり。どれだけ人を変えたか。どれだけ変えてもらったか。どれだけ踏ん張ったか。お互いに。せめて精いっぱいやって見たか。それで花火の美しさは決まる。
アーメン。

間。

99 シルヴィア どうすんの？
100 オリヴァー どうすんのって？
101 シルヴィア できることは一つしかない。
102 オリヴァー つまり？
103 シルヴィア やめるんだよ、そういうやつをくわえるのは。
104 オリヴァー 誰のブツ？
105 シルヴィア あんたを抑圧する男のブツ。
106 オリヴァー それは深いわー。
107 シルヴィア ナチスⅡロレックス系の男。
108 オリヴァー 生涯学習講座みたい。「ふしだらな同性愛者のためのマルクス理論」。
109 シルヴィア でも近い将来ファシストのブツを口から出して、そいつを見上げて言うの、たとえば——
110 オリヴァー 「ねえ聞いて」——
111 シルヴィア 「ねえ聞いて、ご立派なイチモツにはたまげたけれど、決めました、何十億年前、魚の先祖が暗黒の海底から這い出たときのような、ちょっとした気分、これからはあたくしくわえるイチモツは選びます——
112 オリヴァー ソーシャルワーカーかヨガのインストラクターにします——
113 シルヴィア 正義、平等、互いに尊敬し合う精神、そういうものを持ち合わせた人、せめてそう思える、

人にします。そういう進化の飛躍が必要なんです、そうしなければ神様はあたくしにどのような末路を用意することでしょう？」
ドブのなか。檻のなか。実存的恐怖のボンデージマスクで窒息死。

間。

115 シルヴィア 解決してよかった。じゃわたしそろそろ……
116 オリヴァー そろそろ何……
117 シルヴィア マリオが来るころだから支度とかね。いろいろと。
118 オリヴァー 帰れってこと？
119 シルヴィア いや、まあ、一杯だけ飲んでマリオに会ってくのはかまわない、けど……
120 オリヴァー けど何？

間。

121 シルヴィア つまりはこういうこと。いてあげるのが楽しくないってことじゃない。たまにはね。実際にあげてるし。
122 オリヴァー たまには？
123 シルヴィア わたし余裕が必要なの、オリヴァー。しかも今晚だけのことじゃなくて。
124 オリヴァー 余裕？ という意味、余裕が必要って？

疑問が宙づりになる。

125 オリヴァー じゃ、とつとと消えますよ。

126 シルヴィア あんたがここにいとね、何となく支配されちゃうから。
127 オリヴァー 「支配」？

128 シルヴィア 魅力ってゆーか、あんたのカリスマ、あんたの存在感。

129 オリヴァー それってひとときのお砂糖のつもり？

130 シルヴィア だから今夜はそんなふうここにいてほしくないの。わたしほんとに、ほんとに好きな人と出会えたから――

131 オリヴァー 追い出しかよ。

132 シルヴィア だから圧倒的に思うわけ、これからはちょっと、あんたのことより彼のことに集中しようって。

133 オリヴァー 追い出しですか。

134 シルヴィア 悪いことじゃないと思うし。

135 オリヴァー 僕たち終わったね。

136 シルヴィア お互いにとって。

間。

137 シルヴィア はい。言っちゃった。

ブザーが鳴る。

138 シルヴィア ヤベ。

139 オリヴァー 明るい未来だ。

140 シルヴィア もう来ちゃった。

141 オリヴァー じゃ、消えますよ。

142 シルヴィア いて。一杯だけ。そしたら帰って。
143 オリヴァー ぜんぜん歓迎されてないもん、新郎新婦にプレゼントされたコンドームみたい。

シルヴィアはドアへ急ぐ。そして立ち止まる。

144 シルヴィア でも明日は来て。公園に。たぶん……

145 オリヴァー たぶん何？

146 シルヴィア たぶん大事だ、と思うから。それにそう、全部引くるめたものだから。デモンストレーション。セブレレーション。ファッション・ショー。でもいま言った順番で。

147 オリヴァー 陪審員は審議中。ほら、さっさと開けてやんな。

シルヴィアは部屋を駆け出る。オリヴァーはその場に残り、一人きり。考え込み、何かを思い出そうとしているようである。目を閉じ、そしてささやくように――

148 オリヴァー フィリップ。

第9場

一九五八年

診察所。シンプルである。机一脚、椅子二脚、もしかするとヘッドレスト付きの検査台も。医者とフィリップが対面して座る。

1 医者
いつですか、はじめて同性の人間に性的魅力を感じたのは？

2 フィリップ
どうだろう……おそらく……

3 医者
思春期、それともそのあと？

4 フィリップ
おそらく思春期です。たぶん……十三歳かそれくらい。学校で。でももちろん……その、

そういう年齢ですからね。よくわかってなかった。こわかったんだらうな。よくわかってなかった。考えないようにしたんです。あえて考えないように。

5 医者
手引きは受けました？

6 フィリップ
失礼？

7 医者
手引きを受けたことは？ 子供時代か思春期に。同性の大人から。年上の男性から何らかの性行為に誘われましたか？ 家族や先生、もしかすると知らない人から。

8 フィリップ
いえ、そんなことは。わたしはまったく……

9 医者
おわかりでしょうが、絶対的に必要なのはこれらの質問に真実をもって答えることです。

10 フィリップ
ええ。もちろん。

11 医者
どの質問にも、まったくもって正直に、勇気をもって答えないことにはわたしの時間もある

あなたの時間も無駄になります。ためらいはすべて脇に置くこと。

12 フィリップ
誘いはありません。手引きもです。誰からも。

13 医者
で、記憶では十三歳ごろに、はじめて同性の人間に性的魅力を感じたと。

14 フィリップ
そのことです。

15 医者
自分とその男の子について性的な空想にふけたことは？

16 フィリップ

17 医者

18 フィリップ

19 医者

20 フィリップ

21 医者

22 フィリップ

23 医者

24 フィリップ

25 医者

26 フィリップ

27 医者

28 フィリップ

いっしょにいて感じたのは……彼のそばにいたとき。強くて圧倒的な魅力を。

ペニスは勃ちましたか？つまり、興奮しましたか？

おそらく。どうだろう。全部が、なんというかつながっていました。何もかもが。

「つながっていた」。どういう意味です、「つながっていた」とは？

いや、たしかに体が何か感じたけれど、でもそれは……

その男の子とは何らかの性行為を？

そんな、まさか。わたしは……本当に知らなかったんです、まさか自分以外に……自分以外にそういう感情をもつ人間がいるとは。振り返ってみるとお互いそうだったのかもしれない、でもそのときは。

どんな空想にふけたか説明してください、ご自分と、その夢中になったという男の子について。

わかりません。いっしょにいるところとか。肉体的に。

肛門に挿入することは？

わかりません……たぶん。もしかしたら。

空想のなかで自分が性的に受け役だったか攻め役だったか、覚えていますか？

本当に思い出せません。いっしょにいたいと思ったことは覚えています。肉体的な意味で。でも細かいことまでは。敢えて忘れようとしてきたんだと思います。はつきりしません。

間、医者は目の前にある何枚かの書類に目を通す。

29 医者

30 フィリップ

31 医者

ここに最近一人の男性と性的関係をもったとありますね、数ヶ月に渡って続いたと。

そうです、はい。

その関係では肛門を使ったんですね。

32 フィリップ

はい。はい、そうです。

33 医者

その男性とは何回性行為をしましたか？

34 フィリップ

その、それは……その、四ヶ月に渡って。

35 医者

その四ヶ月のあいだ、何回性的に親密な関係を持ちました？

36 フィリップ

いや、何とも言いにくくて。たぶん平均して週に二、三回。

37 医者

で何がその……関係を終わらせたんですか？

38 フィリップ

僕です。僕が終わらせました。

39 医者

一致協力して、二人が共有する性癖と闘った。

40 フィリップ

はい。

41 医者

その男性とは連絡を絶っていますか？ つまり、彼を生活からしっかり遠ざけることができていますか？

42 フィリップ

はい。

43 医者

頭のなかから消し去っていますか？

44 フィリップ

はい？

45 医者

頭のなかからしっかり彼を消し去っていますか？ 性的な空想を。

46 フィリップ

ええ。どうにか。

47 医者

その関係が終わって以来、べつの男と性行為をしたことはありますか？

48 フィリップ

いいえ。いいえ、ありません。

間。

49 医者

これは過酷な治療です、それは間違いありません。まずはお祝いを申し上げます、あなたがしかるべき手を打って今日ここへいらしたこと。きつと楽ではなかったでしょう。いまぎつとお話した感じと、デイヴィーズ先生にうかがった話からして、大変苦勞された

はずだ。しかしこの厄介な敵、この倒錯との闘いはあなたの人格形成において不可欠な部分を占めている。あなたも同意されるでしょう。

フィリップは何も言わない。

50 医者 必要なものは持参されましたね。

51 フィリップ はい、持ってきました。着替え。歯ブラシ。

52 医者 よろしい。すぐ看護婦がお部屋へ案内します。目的は治療のあいだずっと部屋にいることです。そうですね、少なくともあすの朝までは。

53 フィリップ わかりました。

54 医者 部屋はシンプルです。禁欲的。持ち込み品はなし。ベッド一台。以上。窓もなし。事前に歯を磨くといいでしょう。それからご自分のパジャマに着替えて。もちろんふさわしいものは提供できますが。着るものなら。

55 フィリップ パジャマを持ってきました。
56 医者 よろしい。

間。

57 医者 部屋に写真があります。写真集が何冊か。ぜひともそれを見てください。ポルノ的なものです、同性愛的内容の。約一時間、部屋に一人きりでいてもらいます。そのあいだでできるだけ写真を見ましょうか。きっと興奮するでしょう。

間。

58 医者

一時間後、午後九時ごろに看護婦がうかがって注射をします、アポモルFINEをたっぷり
と。嘔吐を誘発する薬です。注射から十分か十五分経つと気持ち悪くなるでしょう。強
烈な吐き気、ひよつとすると目まいも。この治療を受ける患者さんはたいい洗面器や吐
くもの、何らかの容器を欲されました。しかしわたしの発見では、治療が最も効果を上げ
るには、そういうものを提供しないのがいちばんです。部屋のなかに吐けば、自分の吐い
たものに囲まれたまま、朝まで治療を続けることになりますから。注射をしてひとしきり
吐いたあと、肝心なのはボルノ写真を見続けること。二時間したら、また看護婦がうか
がって二回目の注射をします。これが朝まで三回くり返される。そして注射の合間には
ぜひ、提供されたボルノ写真を見続けるのがいいでしょう。これで治療の効果が上がり、
成功の可能性が増すわけです。

間。

59 医者

何か質問は？

60 フィリップ

はい……僕は……デイヴィーズ先生に聞いたんですが、いくつか事例が。特定の個人が関
わっている。

61 医者

ああ、ええ。これまでも何人か同じ治療を望まれました。つまり、ある特定の個人が……

62 フィリップ

はい。

63 医者

写真は持参されましたね。その人物の。

64 フィリップ

はい。持ってきました。

65 医者

そう。まあ、それならまったく簡単です。写真を持って入ってください。その人物の。そ
れを取り入れます。治療に組み入れます。ほかの写真といっしょに見るんです。よくあ
る依頼です。

66 フィリップ

はい。

間。

67 フィリップ　ですが、先生……

68 医者　はい？

69 フィリップ　わたしが知りたいのは……他のこと。他の気持ち。つまり、性的なものに限らない感情。

70 医者　ええ。

71 フィリップ　そういうのは……いつかは……

ぎこちない間がある。

72 医者　看護婦は準備できています。朝またお会いしましょう。

73 フィリップ　はい。

74 医者　ほかにはありませんね？

75 フィリップ　ええ。ええ、ありません。

フィリップ立ち上がる。

76 医者　ところで……

77 フィリップ　何です、先生？

78 医者　ここへいらした理由をうかがっても？ 何をきっかけに来ようと決心されました？ 研究上重要なことなんです。

間。

79 フィリップ 忘れるために。
80 医者 忘れるため？
81 フィリップ もっと楽に生きたくて。
82 医者 みんなそうでしょう？
83 フィリップ そうですね。

暗転。

第10場

二〇〇八年

公園のベンチ——前と同じベンチである。シルヴィアがオリヴァーと二人で座っている。二人はシャンパンの栓を抜いたところであり、フルートグラスで飲んでいる。背景からはブライド・パーティーの喧噪がいろいろと聞こえてくる——口笛、叫び声、音楽。セレブレーションの音。

1 シルヴィア

で、バスに乗ってたら、一人ブロンドの女の子がね、十五歳くらいでおっかなくて、熱烈なファンクラブに囲まれて、その子でっかい声で二言目には「ゲイ」って言うの。それってゲイ、あれってゲイ、何かもゲイ。その歌ゲイだわー、あのドラマってゲイだわー、このサンドイッチ、ゲイだわー。だからわたしちょびっと勇気を出して振り向いて、高圧的にならないよう言ったの、「すみません……」

2 オリヴァー

申し訳ありません。

3 シルヴィア

申し訳ありません、でもお願いします、そういう文脈で「ゲイ」って言葉を使わないでくださいますか……

4 オリヴァー

ゲイ、イコール、ダサイ。水準以下。

5 シルヴィア

せめてよく考えてからにしてください、あなたにはちょっとわからないのかもしれないけど、傷つく人が大勢いるしわたしも不愉快です。

6 オリヴァー

よく刺し殺されなかったね？

7 シルヴィア

でその一時間後、ジェニファアの家でディナーしてて——

8 オリヴァー

あんな子とよくいつまでも友達でいるわ……

9 シルヴィア

——同性婚の話になったのね。そこにハリーとかいう男がいて言うの、だいたいこんなやうなこと。「ま、遺産相続の問題はもつともだろうけど、それ以外のことはあいつら関心ないだろ」って、どういう意味よ、「だってさ、やつらのほとんどは楽しくやりたいだけだ

ろ」って、そしたらソーニャまで話に加わってきてき、これはそのまま引用するね、「あたしの親友も何人かゲイだけど」……

元彼もほとんどね。

「なんで結婚する必要があるんだろうね、てかパートナーシップで十分じゃない?」、そしてまたハリーが出てきてき、「だいたい誰が結婚なんかしたがんの?」って、「公園で盛り合っさかてりゃいいじゃん、俺ならそうしたい。」、そしたらみんな大爆笑、そこでわたし立ち上がったの。両足でしっかり立ち上がって……

片足じゃかっこわりもんね。

言ってやったの、「ハリー、彼らの多くが公園にいた理由はそもそもうちに居場所がなかったからなんだよ。追放の身だったの。」

「追放の身」。いいわーそれ。

だけどそいつら見てたらさ、バカではないの、てゆーか、想像力がちょっと足りないんだろ。うけど必ずしもバカとは言えないわけ、で考えたんだよね……

考えたって何を……?

うーん、わかんない。でも考えたの、オリー、これまでにどれだけの闘いがくり広げられたか。何と闘ってきたのか。ヘイトだけじゃない、他にもある、もっと静かだけどなかなか消えないもの。あんたが何者であるか決めつける世界。あいつらの言うこと聞いと、あんたをおとしめてんの。そしてどっかであんたも、オリー、あいつらの言うことを信じてる。

僕ってだまされやすい、それはほんと。

だからわたし考えたの、いったいどうこのために闘いはくり広げられたのか。何のための闘いだっただか。

それは考えまくったねー。

10 オリヴァー

11 シルヴィア

12 オリヴァー

13 シルヴィア

14 オリヴァー

15 シルヴィア

16 オリヴァー

17 シルヴィア

18 オリヴァー

19 シルヴィア

20 オリヴァー

彼女のシャンパンを注ぎ足す。

21 オリヴァー もっと飲みな。そろそろ街頭演説は終了願います。

フィリップ登場。

22 フィリップ 下のほうまで響いてたよ。

23 オリヴァー さすが女優。

24 シルヴィア 声でなかった？

25 フィリップ 見事にね。

26 シルヴィア やあだ。わたしっていかにもだわ。

間。

27 フィリップ サンドイッチ持ってきたよ。

28 シルヴィア オリヴァーもすこしつくってくれた。マリオは向かってる。

29 オリヴァー 具は何？

30 フィリップ チョリソー。鴨。タップナード。

31 シルヴィア チーズとピクルスの何が悪いのよ？

32 フィリップ ブルーベリーもあるよ。

33 オリヴァー うまそ。

間。

34 シルヴィア 昨日ね、マリオがまた子供の話をするの。
子供？

36 シルヴィア 「ずっと子供がほしかった」って。

37 オリヴァー ぞっこんなの。

38 シルヴィア わたしも愛してる。

39 フィリップ 出会ったばかりじゃないの？

40 シルヴィア 自分で歌を書くの。ギター持ってる。

41 オリヴァー 彼女が知るべきはそれで十分。

42 シルヴィア 反戦デモには必ず行ってる。本を読んで読みまくってる。

43 フィリップ だから？

44 オリヴァー どれもいい兆候だって言ってるだよ。

45 シルヴィア ベッドでも最高。

46 フィリップ 大事だね。

47 シルヴィア マリオに愛されながら思うのね……この愛から何か生まれるとしたら……この愛がそう
いうかたちで実を結ぶとしたら、だったらその覚悟はできてるし、それは素晴らしいこと
だ、てゆーか、幸運でしょ、贈りものだもん。神様からの。命って。何でもいいけど。
赤ちゃんつくるんだってさ。

48 オリヴァー でもそうならなくても、てゆーか、授からなくても、授からないことになったとしてもか
まわない。いまわたしたちが手にしてるもので十分、ってこと。

間。シルヴィアはふと、彼らを二人にすべきだと気づく。

50 シルヴィア わたし……アイスクリーム買ってくる。
51 オリヴァー アイスクリーム？ ランチもまだじゃん。

52 フィリップ シルヴィアはアイスクリームがほしいんだよ、オリヴァー。
53 オリヴァー 僕も行く。
54 シルヴィア 僕も？ 何、僕も行くって？
55 オリヴァー 僕も食べたい。
56 シルヴィア 馬鹿か。
57 オリヴァー あ、そうだ。ストーカーはやめるんだった。
58 フィリップ ストーカー？
59 オリヴァー さっさと行けば。あんたはもう自由な女。
60 シルヴィア ようやく。
61 オリヴァー 手術は成功。僕の腕はあんたの腰から切除されました。
62 シルヴィア せいせいした。
63 オリヴァー お近づきになれてよかったです。

シルヴィアは去ろうとする。

64 シルヴィア シャンパン飲んで。空けちゃって。
65 オリヴァー オッケ。
66 フィリップ そうする。
67 シルヴィア 闘いを思い出すんだよ、オリー。
68 オリヴァー 何の闘い？

シルヴィアは去る。

69 オリヴァー ああ、その闘いか。

間。

70 オリヴァー やっ。

71 フィリップ よっ。

72 オリヴァー どう？

73 フィリップ 元氣。元氣だよ。

74 オリヴァー そう。

長い間。二人公園を見渡す。同時に話し始める。

75 オリヴァー 僕まさか――

76 フィリップ 君もう――

77 オリヴァー ごめん。

78 フィリップ ううん。何？

79 オリヴァー 先、どうぞ。

80 フィリップ いい。君から。

間。

81 オリヴァー 変化って信じる？

82 フィリップ 変化って信じる？

83 オリヴァー ありがたいよね、僕らって？

84 フィリップ ありがたい？

85 オリヴァー
86 フィリップ
つまり、考えてみて。この自由。僕らが手にしてる。
どんな自由？

87 オリヴァー
88 フィリップ
声を上げられない人たちがいた。何百年も、何千年も。
世界の大部分ではないも。声を上げられない。

89 オリヴァー
90 フィリップ
そう。だからなおさら……
なおさら何？

91 オリヴァー
大切だ、ってことかな。いらないものといっしょに大切なものを捨ててしまわないことが。
僕らにとって。ついてきてる？

92 フィリップ
93 オリヴァー
いまいち。
ほら、大自然のドキュメンタリーとか見るとき……
大自然のドキュメンタリー？

94 フィリップ
95 オリヴァー
だから、みんな馬鹿みたいに殺し合ってるでしょ。そんなことばっか。殺し合い。あと繁殖と。とんでもない苦痛を与え合って殺し合って……
イルカを除けば。

96 フィリップ
97 オリヴァー
たしかに。イルカは年じゅう自閉症の子供と泳いでる。でもイルカを除けば殺し合いばかりしてる。でも一つだけ、つまり、ただ一つだけ僕らを区別してるもの、僕らをちがうものに、僕らを人間にしているもの、それは、僕らが発見しつつあるこの力、浸透させなきゃならないこと、何をするにも愛を込めて、愛を与えるってこと。そして何かしらのリスペクト。僕らにはそれしかない。互いに耳を傾けること。

間。

98 オリヴァー
99 フィリップ
とにかくそういうこと。こないだ言おうとしたのもそういうこと。
何？

100 オリヴァー 僕らが出会った夜のこと。あの女性のこと話してくれた。君が写真に撮った人。彼女の

立場に身を置く君の力。本物だった。

101 フィリップ ああ、あれ。

102 オリヴァー おかげで僕は希望を感じた。

間。

103 オリヴァー まだ質問に答えてくれてない。

104 フィリップ 何の？

105 オリヴァー 人は変化するって信じる？

106 フィリップ そうじゃなかった。変化を信じるかって質問だった。人は変化するかじゃなくて。

107 オリヴァー 微調整。

108 フィリップ どうして？

109 オリヴァー それは、ほら。僕たち。

110 フィリップ 俺たちが何？

111 オリヴァー だから……

間。

112 オリヴァー すごく愛してる。心の底から。

間。

113 フィリップ 今日なんでここ来ちゃったのかなー。

114 オリヴァー

115 フィリップ 「魔力」だと思っけど。

116 オリヴァー チャーミングだし。

117 フィリップ チャラくもなる。

118 オリヴァー それはそれは。

119 フィリップ うぬぼれ屋。

120 オリヴァー 素敵。

121 フィリップ しかもセックス中毒、知らないやつとばっかり。

122 オリヴァー それはずっと思ってた。

123 フィリップ でも俺は「疑わしきは罰せず」にしちゃうんだよな。

124 オリヴァー 感謝です。篤い信仰心に。

125 フィリップ どこまでも頑固な愚かさにね。

126 オリヴァー とてもかしこいよ、頑固なりに。

127 フィリップ てゆーか完全に頭おかしい。

128 オリヴァー かもね。

間、そしてオリヴァーはふと感情に呑み込まれる。あとずさる。

129 フィリップ 何？

130 オリヴァー 何も……僕……

131 フィリップ 何なの？

132 オリヴァー 何も。もしよかったら……

133 フィリップ よかったら何？

134 オリヴァー しばらく君んちのソファで寝てもいい？

135 フィリップ うちのソファで？
136 オリヴァー 仕事が。稼がないかも。いろいろと……自分の本にかかりたくて。
137 フィリップ てつきり、仕事がたくさん入ってきてると……
138 オリヴァー みんななんかポシャっちゃって。
139 フィリップ 僕らしくないけど。とにかく厳しくなるかもしれない。しばらくは。
140 オリヴァー オッケ。でも絶対ソファで。
了解。

間。

141 フィリップ なんだかんだいって……
142 オリヴァー 何？
143 フィリップ うん、長くはないのかもしれない……
144 オリヴァー 何が？
145 フィリップ 一年半って。
146 オリヴァー 十九ヶ月。今度の木曜日で。
147 フィリップ 僕たち知り合ってから。
148 オリヴァー 結構な年月だよ。
149 フィリップ 大したことないのかもしれないけど……
150 オリヴァー けど？
151 フィリップ それなりの歴史だ。
152 オリヴァー うん。
153 フィリップ 君と俺には……
154 オリヴァー 僕たちには？

155 フィリップ
それなりの歴史がある。

間。

156 フィリップ
それにごめん。
157 オリヴァー
何が？

158 フィリップ
わからない。もし……もし俺が何かしたなら。一度でも。傷つけたり。不安にさせたり。
わかんない。何かしたんだとしたら。

159 オリヴァー
僕を裏切った。

160 フィリップ
君を裏切った？

161 オリヴァー
そう。

162 フィリップ
それってどういう……

163 オリヴァー
気にしないで。

間。二人は公園を見渡し、周囲の人々を見る。オリヴァーはフィリップにシャンパンを一杯注ぐ。

164 オリヴァー
シャンパン飲んだら。

165 フィリップ
だな、飲もう。

二人は眺め続ける。

166 オリヴァー
あの二人見える？ 自転車乗ってる。
167 フィリップ
ラブラブだ。

168 オリヴァー
169 フィリップ
170 オリヴァー
171 フィリップ
172 オリヴァー
173 フィリップ
174 オリヴァー
175 フィリップ
176 オリヴァー
177 フィリップ
178 オリヴァー
179 フィリップ
180 オリヴァー
181 フィリップ

ブロンドのほうが相手の耳に舌入れてる、僕らが着いたときから。
めろめろ。
素敵だね。

あの人九十五歳は行ってるね。

誰？

あそこの人。アイスクリームのパンのそば。

わかんない。

二時の方角。メッシュのタンク。

え、あの人。オーマイガー。

九十五歳。

かっこいい。サバイバーだ。

彼に祝福を。

僕が九十五歳であのルックスならパーティーひらくね。

君が九十五歳であのルックスなら逮捕してもらうよ。

シルヴィアが戻ってくるが、一九五〇年代の彼女の生まれ変わりである。

ネグリジェを着て、小さなスーツケースを提げている。オリヴァーとフィリップには
見えないが、彼女は舞台の反対側、照明の輪のなかに入ってたらずむ。夢遊病者のよ
うである。

182
シルヴィア

わたしがつぎに目を覚ますのは、旅立ちのとき。あなたはきっとまだ眠ってる。その額に
わたしはキスをして静かに歩き出す。いままでのあなたを責めることはできない。あな
たは恐怖のとりこだった。ひたすら現実にすがりつくしかなかったの、そしてすがりつい
たものはみんなその手のなかで死んでしまった。

産みの苦しみ——あなたはそんな痛みに耐えながら、変わりゆく現実にしがみつく。そしてわたしにできるのは遠くからささやくことだけ——心配はいらない、心配はいらない、心配はいらない。

暗転

終わり

『プライド』を書くにあたり、初期衝動のどこかに相当の怒りがあつたのだと思います。それが何か一つのことがらに対する怒りであつたのだとすれば、それは、社会があらゆる種類のステレオタイプを執拗なまでに要求するという点です。わたしたちは怠惰でいられるよう、安心していられるよう、さまざまな「ステレオタイプ」をつくります。「あいまい」ほど、人に脅威を与えるものはないからです。すべての人間の内なるファシストが好む色は二つあります——白と黒です。そのあわいはありません。

ですが現実の人間は、当然ながら、その二つの色のあいだの豊かで多様な色合いの内に存在します。「汝自身を知れ」と、デルポイの神殿には記されています。自分を知ろうとすることだけが、人生に何らかの意味を与えるのです。本当の愛を求めることも同様です。が、ひよつとすると両者は表裏一体なのかもしれません。

そこでわたしは、二つの異なる時代を生きる何人かの登場人物を生み出そうと考えました。各時代において彼らは、自分をすこしでもよく知ろう、そしてお互いにつながり合おうと闘います。1950年代において、その障壁となるのは、理解できないものをパラノイア的に恐怖する社会、そして社会規範からの逸脱を怖れる行動規範です。そしてのちの時代、現代における障壁は、市場原理が支配する社会、その一員になるために自身のコアな欲求に誠実でいることをやめなければならない社会、あらゆるものが交換可能である、あらゆるものが商取引であると唱えられている社会です。もしかすると後者は前者に対するレスポンスなのかもしれません——暗黙のものは露骨なものになり、隠れていたものはあからさまなものになり、秘められていたものはけたたましいものになるのです。どちらの時代でも、大切なものは失われます。そしてどちらの時代でも、正直であることを求める闘いこそ、困難とはいえ、唯一取り組む価値のある闘いなのです。

わたしにとつてハッピーエンディングとは、登場人物が自分について、自分を追いやるさまざまな力について、物語が始まる時点では知らなかったことがらを知ることです。それは正しい方向へ

の第一歩です。自覚するということです。

わたしは長年、俳優として活動したのち、劇作に転向しました。その際、どのような立場であれ、自分は常に物語芸術に関わっていたのだと気づきました。励みになったのは、舞台俳優としての経験が作家としてのわたしの声を豊かなものにしていたということです。わたしは演技を通じ、劇作のすべてを学んだのです——構造について、人物造形について、台詞のやり取りについて。そしていよいよ劇作に取りかかろうと決心したわたしは、一つの役を具現化するのではなく、多くの役の立場に身を置き、彼らの多くの声を見出そうと試みました。

わたしの作品が日本で上演されると知り、たいへんうれしく思っています。わたしは以前より日本国の文化に惹かれてきましたし、その芸術、文学、映画を通じて、彼方よりあこがれを抱いてきました。英国同様、島国である日本は、豊かで複雑な歴史をもち、この50年ほどのあいだに、とてつもなく大きな社会の変化を経験しました。今回日本を訪れ、『プライド』という作品が日本で歩む人生に関わることができ、たいへん興奮しています。キャスト、クリエイティブチームのみなさま、公演のご成功をお祈りいたします。東京の観客のみなさま、日本初お目見得となるわたしの作品をどうぞご覧ください。お楽しみいただければさいわいです。

心をこめて

アレクシ・ケイ・キャンベル

(2011年 TPT上演に際しての寄稿)

偏見と闘うゲイ・プライド——勝利にあたつて
アレクシ・ケイ・キャンベル

——2013年8月7日付 The Independent 紙

先月、ジェイミー・ロイドから電話があり、彼が今シーズン、トラファルガー・スタジオで演出を手がける3本目の作品として、『プライド』の再演を決めたと知らされたとき、これ以上のよろこびはなかった。わたしたち二人がロイヤル・コート・シアターで初演に取り組んでから5年が経ち、その5年間、わたしは幸運なことに、この戯曲が世界を旅し、何度も生まれ変わる姿を見守ることができた——ニューヨークから東京へ、ストックホルムからシドニーへ。そしていま、作品が帰郷を果たそうとしている。折しも同性婚容認に向けた運動が大きく進展したばかりであり、完璧なタイミングでの上演ではないだろうか。

数年前に誰が考えただろう？——まさか同性婚が可能になるとは。同性で愛し合う二人の人間が、法的にも社会的にも、ヘテロセクシュアルな結びつきと完全に平等な関係を認められるとは。そしてわたしは、たいへん意義ある闘いに勝利がもたらされたことを悟った——この勝利によつて宣言されたのだ、同性カップルの関係は、ストレートの友人たちが享受する関係と同じく大切なもの、正当なもの、神聖不可侵なものである、と。これは大きな前進の瞬間であり、その意義をあなどることはできない。一種の革命であり、世界の他の地域が目指すべき方向を示したのだ。

けれども、かなしいかな、多くの国々はあとに続くことにそれほど熱心ではない。こちらの状況が進んでいるのとは裏腹に、他の国々では暗黒の力がますます幅を利かせている——ロシアのウラジミール・プーチン政権は最近、いわゆる伝統的なセックスを除く性的関係の「宣伝」を、違法とする法律を発効させた。言い換えれば、アートやメディアにおいて同性愛の関係をポジティブに描けば、法に反することになるのだ。

カメルーンでは、ゲイ人権活動家エリック・オヘナ・ランバンブが、自分の信念を貫き通したことから残忍な拷問を受け、殺害された。グルジアでは、首都トビリシで初めてのゲイ・パレードに参加しようとした勇敢な数名が、いきり立った何千人もの男たちに取り囲まれたため、現場から護送せざるをえないという事態があった。

また、世界のイスラム諸国でも、同性愛は道徳に反するものとされ、嫌悪され、おそろしい刑罰を加えられる。こうした現状から思い出されるのは、最近この国で起きた出来事が一つの戦闘での勝利を意味したとしても、ホモフォビアをめぐる戦争はまだまだ終わらない、ということだ。そんなことを考えながら思い出した——わたしはそもそも何に駆り立てられ、『プライド』という劇を書いたのか。それはおよそこういうことだ。「お前のような人間はまちがっている、お前たちのように愛し合うことはまちがっている」——そうたびたび言い聞かされる世の中で、自分を信じることはあまりにも難しい。いま映像で、トビリシで猛り狂う群衆が護送車を取り囲む様子を見ながら、ホモフォビアのルーツとは何なのか、なぜここまで根深いもののかを問い直してみる。きつと答えはたくさんある——あの男たちの多くは、心のなかに隠しもった同性愛的志向におびえているのかもしれない。自分たちが女々しいと見なす者たちのせいで集団が弱体化することをおそれているのかもしれない。理解の及ばないものを憎悪しているのかもしれない。あるいは、それらが組み合わさった結果なのかもしれない。

とはいえ、ホモフォビアが世界に絶えず蔓延してきた理由が何であれ、冷静に考えてみるといい。そのことがゲイの人々に対し——彼らの自己意識に、彼らのアイデンティティと自信に対し——どんな影響を及ぼしたか。わたしがこの戯曲で掘り下げようと思ったのは、主にそういうことだ——人が成長し、自分を根源的に知ろうとするとき、どんなくびきを捨て去らなければならないのか、同性愛の女性・男性は何世代にも渡り、本当の意味で自分に対するプライドを手に入れるため、どれほどの苦しみを味わい、どんな闘いをくり広げてきたのか。

というのも、わたし自身、人生を振り返ってみると、もつとも記憶に残っているのは、自分が何者であるかを告げる声が聞こえてくる感覚なのだ。それはわたしのことなど何ひとつ知らない者たちの声だった。また、わたしは本場のアイデンティティを隠すことができるようになった。80年代のギリシャの学校で、わたしは即座に知ったのだ——ゲイであるとはすなわち、からかわれ、あざけられることだ、と。のちに、10代のわたしは映画に夢中になった。そこで次から次へと目にしたのは、ゲイのネガティブなステレオタイプ、つまり最後に命を落とすか、もしくは無惨な運命に追い込まれるような人物ばかりだった（この歴史については、1995年に発表されたドキュメンタリー映画『セロイド・クロゼット』で見事につづられている）。やがて、恐怖に鼓動を高鳴らせながらも、わたしははじめて、ある小説のなかにゲイの性交渉の描写を見つけた——別荘に誰かが置き忘れた怪奇小説だった——二人の男が罪悪感と羞恥心のうちに愛し合い、やがてネズミに蝕まれる、というものだ。当時13歳、自分の気持ちとセクシュアリティを何とか受け入れようとしていた身にとって、この物語が示すところは明らかだった——「お前はろくでもない人間だ、お前は幸せや愛のない人生を送るしかないのだ。」

そういった文化的圧力と、ゲイ・アイデンティティが長年に渡ってこうむってきた影響について考え始めたそのとき、わたしはこの戯曲の形式と構造を思いついた——三人の人物が二つの異なる時代（1950年代と現代）に存在し、各時代で幅を利かせている社会の力が彼らのあり方に影響を及ぼしている。このメタファーを中心に据えることにより、ゲイであるとはどういうことか、**「性の革命」**と前後する二つの時代と比較、対照してみようと考えた。そして同時に、二つの時代につながりがあることをほのめかし、登場人物の一人のあり方が前の時代の自分から直接影響を受けていることを暗に描こうとした——つまり、現代における彼のふるまいが多くの場合、過去の自分が社会から受けた影響に対するリアクションとなっているのだ。この形式を戯曲に与えたおかげで、個人的事象と歴史的事象が、ゲイ・アイデンティティという文脈のなかで世代を超え、いかにつながっているか、その点

を存分に掘り下げることができ、また、個々の人間は自分の生まれてきた社会とどうつながっているのか、その面を掘り起こすことができると思った。人は自分より前に生きた人々から何を受け継いでいるのか、ということだ。また、その探求を詩的で暗示的なもの、想像力に働きかけるものとすることができた。

そしていま、ジェイミー・ロイドが、今回の再演に出演する四人の並外れた俳優たち——ヘイリー・アトウェル、ハリー・ハッデン・ペイトン、マシュー・ホーン、アル・ウィーヴァー——と稽古に取り組むのを見守りながら、そもそもどういうわけでこの劇を書いたのか、わたしは原点に立ち戻ってみる。考えられるのはこれだけだ——わたしは英雄という柄ではないし、そうであつたこともない。すこしは勇気の要ることもやつてみた——20歳のとき、家族に対し、自分もそういう人間だとカミングアウトした——そして、自分は何者なのか、自分を突き動かすものは何なのか、日々理解を深めようとしてきた。けれどもわたしは、潮の流れに立ち向かい、憎悪に満ちた人々を相手に闘うことができるような、あの勇敢さをもった人間ではない——わたしはエリック・オヘナ・ランバンブではない。それでもたぶん、勇気が足りないとは知っているからこそ、劇を書くことで、ランバンブほどではないにせよ、人々のために自分なりの貢献を果たそうという意欲をもち続けることができたのだ。それがどの国の人々であろうと、どの世代の人々であろうとだ。

この戯曲のなかで、登場人物の一人がゲイ・プライドについてこう語る。「教えてよ、あれつてデモンストレーション、セレブレーション、それともファッション・ショー？」わたしはこう答えよう——いまもデモンストレーションだ。そして、ゲイの人々はあらゆる面でストレートの人々と平等だと全世界が認めるまで、デモンストレーションであり続ける。それでもいまは、ほんの束の間だけれども、いまのところは「セレブレーション」としてもいいのだろう——少なくとも世界のこの場所、歴史のこの時点において、前へ進むための意義ある一步を踏み出したのだから。突き詰めていえば、愛し合うための一步だ。

